

4：前項で述べたように学生と教授の関係が日本より親密であり、やる気のある学生にとっては自分の研究を深めてゆくチャンスが日本より多く与えられている。

5：進級は日本の大学より厳しいが、学科の選択を「間違えた」学生には、やりなおしの機会があたえられている。つまり、一つの学科を落第・退学しても他の大学に転校したり、他の学科に入学しなおし、新たに勉強しなおすことが簡単にできる。また、それによって経歴に傷がつく、ということもない。

6：上記のような環境が与えられている結果として、ポーランドでは結婚している学生（しかも夫婦ともに大学生のカップル）が多い。また、一つの大学を中退または卒業した後、2つめの大学に進学する学生が多い。（以前は、徴兵をのがれるため大学生を何年も続ける男子学生が多かった、とのことだが、事実上徴兵制がなくなった現在もこの傾向は続いている）

このように考えてゆくと、ポーランドの学生は、日本の学生よりもさまざまな面で恵まれているように思われる。物質的な面ではともかく、精神的には日本の学生よりはずっと余裕のある学生生活を送っていることは確かである。

しかし、このような余裕のある学生生活も、改革の進展と共に変化しつつある。すでに、急激なインフレーションの進展が学生生活を直撃している。以前は奨学金で生活費をすべてまかなうことができたが、最近では奨学金だけではやや不足気味だという。とくに大都市の大学生は、二人用の学生寮の1室を4人でシェアして部屋代を節約するなど、金銭的にはかなり苦勞しているようだ。

さらに、改革の進展と共に教育費の受益者負担の考え方が強くなってきた。上に「大学教育はすべて無償である」と述べたが、じつは92/93年度の新入生から、一部の大学で授業料を徴収しはじめた。現在この金額はごく安いですが、今後、私立学校の増加と共に「教育はただではない」という意識が強くなってゆくものと思われる。これは「どうせお金を払うなら、いい大学へ」という傾向を強め、大学の受験競争が始まる可能性をはらんでいる。

また、卒業後の進路についても、失業率の増加と所得格差の拡大により就職問題が学生の大きな課題になりつつある。たとえば、給料の高い外資系の企業はワルシャワ大学やヤギウォ大学といった「有名大学」の学生をとりたがる一方、地方都市の国営企業は業績が悪化しており、今まで採用していた、地元の大学出身の卒業生をとらなくなった。

以上のような変化のあらわれとして、いままではなかった大学間の序列（格差）がしだいに人々に意識されるようになってきたようである。この傾向は今後もさらに進むものと考えなければならない。

大学の序列化の一つの例証として、ポズナニ市で発行されている雑誌『WPROST』（発売はポーランド全国、1993年6月13日号）に掲載されたポーランドの大学ランキングを紹介する。この記事においては、ここに紹介した総合ランキングのほかに、競争率の高かった大学・学科ベストテンや学部の新設に力をいれている大学、今後需要が増えるであろう学科別の大学ランキングなどが取り上げられている。評価の基準は「学生一人あたりの教員数、学生の卒業率、海外の研修機関へ留学している研究者の数、論文の数などを総合的に評価した」とのみ書かれており、具体的な評価方法は不明である（日本のような、入学試験の偏差値による評価ではない）。しかし、ポーランドに長く住んでいる人の話によれば、このようなランキングが雑誌に発表されたこと自体、過去に記憶がない、とのこと

である。

順位	大学名
1.	ワルシャワ大学
2.	ヤギウォ大学
3.	マリー・キュリー大学／プロツワフ工科大学
5.	アダム・ミツキエビッチ大学／プロツワフ大学
7.	グダニスク工科大学
8.	ワルシャワ商科大学／コペルニクス大学
10.	カトビツェ医科大学
11.	ワルシャワ工科大学／ワルシャワ農科大学／ポズナニ経済大学
14.	グダニスク大学／カトリック大学ルブリン
16.	グデニア航海大学

もう一つ、日本語教育に関係が深い、外国語教育関係のランキングを掲げる。

順位	
1.	アダム・ミツキエビッチ大学
2.	ヤギウォ大学
3.	ワルシャワ大学
5.	ウッジ大学
6.	ポズナニ経済大学／クラコフ大学

3：生涯教育とクラブ

教育を終えたあとの社会人に対する再教育の制度は日本と同様、あまり発達していない。ただし、ポーランドの場合、大学入学がむずかしくはないので、その気になれば、いくつになっても大学にもどって勉強ができる（25歳以上の学生には、学割がないなど、若い学生より条件は少し不利にはなる）

趣味の分野については、日本のように、企業が経営するカルチャー・センターやアスレチック・クラブはないものの、同好者があつまった、クラブやサークル活動がさかんである。さまざまな分野のサークルがあるが、スポーツ関係では、日本の武道に人気がある。柔道・剣道・合気道・空手から、日本ではあまり一般的ではない古武道にいたるまで愛好者が存在し、人口あたりの比率から言うと日本以上にさかんだとさえいえる。冬が長いポーランドには、屋内で、しかもあまり広い場所を必要とせず、かなりの運動になる武道が、むいているのかと思われる。そして、このようなサークル活動をきっかけに、日本に興味をもち、日本学科に進む学生も多い。

[2] ポーランドの日本語教育—その現状—

1: 総論

[ポーランドの日本語教育]

ポーランドおよびポーランド人にとって日本は地理的にも心理的にも、はるか遠くの国であり、社会体制がことなっていたことも手伝って、今までほとんど日本語教育はおこなわれてこなかった。

ポーランドの教育機関で、過去10年以上継続して日本語教育をおこなってきたのは、ワルシャワ大学ただ1校である。

1989年の改革前後から、ようやく日本や日本語についての関心が高まり、ワルシャワ大学のほかに日本語教育を試みる機関・組織がいくつか生まれた。したがって、ポーランドの日本語教育は、まだ創成期の段階にある。

この項では、ポーランドにおける日本語教育の現状について述べる。

ポーランドにおける日本語教育機関と学習者数

機関	名称	人数
大学	ワルシャワ大学日本学科	67名
	アダム・ミツキエビッチ大学日本学科	16名
	ヤギウォ大学日本学科	45名
	ワルシャワ大学(全学対象)	10名
	アダム・ミツキエビッチ大学中国学科/情報学科	20名*
	ワルシャワ経済大学	16名
	コペルニクス大学(全学対象)	7名
	ポズナニ経済大学(営利を目的とした私的な教室?)	(不明)
中等学校	ウッジ第二高校(課外活動として、試験的に)	45名*
市民講座	ウッジ(ポーランド日本協会ウッジ支部)	5名
	ポズナニ(ポーランド日本協会ビエルゴポルスキ支部)	3名*
	ワルシャワ(ポーランド日本学基金)	40名*

(1993年6月現在)

大学の学習者数は、学部学生のみ。また、日本留学中の学生は含まない。また、人数の後の*は概数。他にウッジ大学、ウッジ工科大学、ワルシャワの高校2校およびポズナニの高校1校でも、かつて日本語教育がおこなわれたことがある。この表のほかに、教師・大学院生などを含めても、ポーランドの日本語学習人口は300名前後と推定される。

[大学における日本語教育]

ポーランドの日本語教育の中心となっているのは大学である。現在、正式な日本語(日本学)学科があるのは3大学。なかでもワルシャワ大学日本学科は、きわだって古い伝統をもち、教授陣・卒業生の質量ともに群をぬいている。ヤギウォ大学とアダム・ミツキエビッチ大学の日本学科は設立はごく最近であり、一期生が卒業したばかりである。

ワルシャワ経済大学(旧中央計画統計大学)では経済学・貿易学専攻の学生を対象に日本語講座が開設されている。これはワルシャワ大学の岡崎恒夫氏が中心となって指導しているもので、初級の日本語の他に、日本事情などに力をいれた指導が行われている。

その他の大学については、いずれも正規の講座として設置されたものではなく、自主講座(課外講座)である。(トルンのコペルニクス大学では、93/94年度より正規の外国語科目の一つとして日本語教育が始まる予定)

〔高校における日本語教育〕

中等教育レベルにおける日本語教育はおこなわれていない。いくつかの実験的な試みがあっただけである。また、今後も私立の外国語高校などができないかぎり、中等教育において、本格的な日本語教育がおこなわれることはないだろう。

89年の改革後、ワルシャワの高校2校で日本語教育が始まった。外国語選択科目の一つで、教師はワルシャワ大学日本学科の教官が兼務した。しかし、経済的な理由で中止になり、現在は行われていない。

ポズナニの高校1校でも日本語教育が行われている。ただし、これは受講生から高額の受講料をとっており、在留日本人の講師が営利を目的としておこなっているものである。

（この人物は、数年前、日本大使館－国際交流基金－の支援経費にからんで、詐欺事件をおこした経歴がある）

ウヅ第二高校からはJOCVに強い要請があり、93年4月から試験的に課外授業として日本語を教えている。来年度継続できるかどうかは未定。



ウヅ市の高校生と隊員との交流会

〔市民講座〕

ワルシャワ以外は低調である。ワルシャワでは、ワルシャワ大学日本学科のスタッフが中心になって、市民のための講座を運営している。

それ以外の都市では、ウヅとポズナニでポーランド日本協会が主催する日本語講座がひらかれている。どちらの講座も受講生は3～5人位である。教師の確保が問題で、クラス拡大、充実はむずかしい。

通年の日本語講座とは別に、ポーランド日本協会のオポーレ支部が主催する夏期集中日本語教室が今年、試みられる。この講座には、柏木と本田も講師として参加する予定である。ポーランドでは、夏の休暇が長いので、このような催しは今後もっと多くの街で検討されてよい。

なお、各地にあるポーランド日本協会は、日本文化（美術・工芸・音楽・武道など）の愛好者があつまって運営されており、日本－ポーランド間の文化交流の核になりうる存在である。とくに、ウヅ支部は吉田勝一氏という、熱心な日本人活動家を得て、積極的な活動をしている。吉田氏は、ヤギウォ大学日本学科の講師のほか、ウヅ以外の都市でも、日本文化の紹介をしておられる。

ポーランド日本協会ウッジ支部の活動について

(1) ポーランド日本協会

ポーランド日本協会は戦前にもあったが、戦争で一時中断、その後1979年、日本ポーランド文化協定とともに復活した。

本部 ワルシャワ

支部 ウッジ、ポズナン、カトビツェ、シチェチン、オポーレ、クラコフ

会員数 約450名

(2) ウッジ支部

沿革

1981 有志による日本語学習会の開始

1982 ポーランド日本協会ウッジ支部として設立認可され、吉田勝一氏が招聘される。設立母体団体は国立ウッジ工科大学

第1回日本文化週間開催

市民日本語講座開始

1984 ウッジ工科大学日本語講座、ウッジ第三大学日本語コース、ウッジ美術大学グラフィックデザイン学科漢字デザインコース開設

1991 ウッジ大学日本語講座開設

1993 第11回日本文化週間開催

* ウッジ工科大学、ウッジ大学の日本語講座は、経済的な理由により中断。

* ウッジ第三大学日本語コースは、高齢者対象の生涯教育カリキュラムである。現在5名が学習中、平均年齢は80歳。

* ウッジ美大漢字デザインコースでは、書道をおこなっている。

同支部の会員は現在、約70名。主な活動は毎年6月にひらく日本文化週間、月一回の文化講演会、通年の日本語講座、一般、障害児および初等学校の教員を対象とした、おりがみ教室、市民書道教室などである。協会の運営資金は、会費のほか、市の文化局および一般からの寄付、バザーの収益などがあてられている。

(3) ウッジ支部における日本語講座

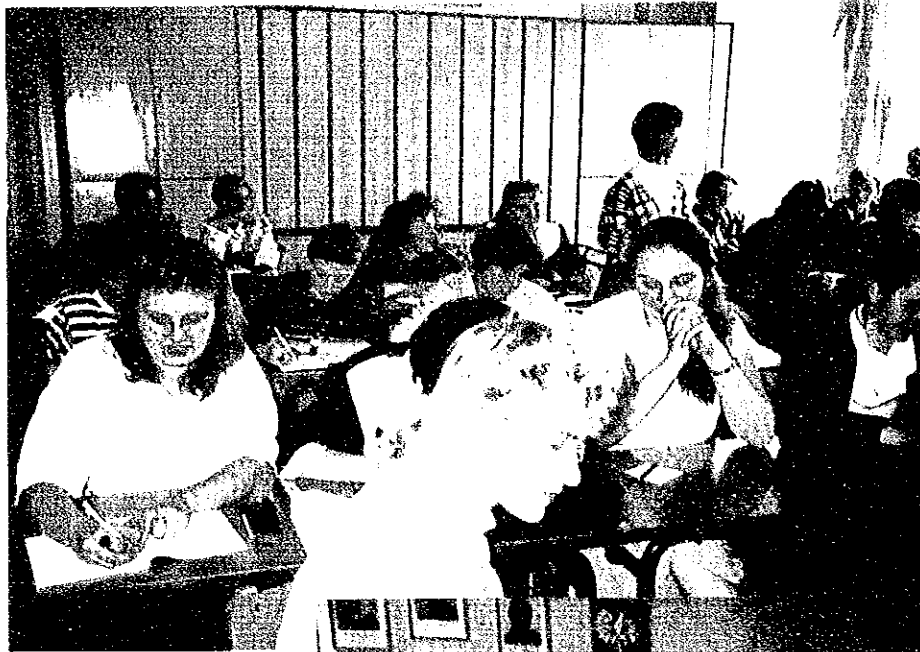
教師は、ボランティアで、吉田氏の他にポーランド人3名、ただし仕事が忙しく、授業ができないことがしばしばある。生徒は初級Ⅰが2名、初級Ⅱが3名。ただし、今年度は教師の都合で、新たな生徒の募集ができなかった。授業は週1回、金曜日にウッジ工科大学の校舎を借りておこなっている。初級Ⅰは全くの初心者のためのクラスで、教材は教師がそのつどテーマを決めて作成している。初級Ⅱは、すでにⅠを終了した学生が対象。教科書は『日本語初歩』を使用している。

ポーランド日本協会に隊員を一人要請するほどの仕事はないが、ワルシャワ大学、ウッジ大学などに隊員が派遣されたときには、ぜひ協力をえたいとのことである。

2: ワルシャワ大学(新言語学部東洋学研究所日本・朝鮮学科)

[ワルシャワ大学概要]

1818年に創立された。現在18の学部、4つの教員養成短大(3年制)7つの付属研究所からなる。学生数は26338名。内訳は昼間課程19524名、通信課程5922名、夜間課程892名となっている。教職員数は2927名(92/93年度)



ウツジ第二高校での
日本語の授業

ウツジ第二高校



ウツジ市民講座
講師は吉田勝一氏

ウッジ市民講座



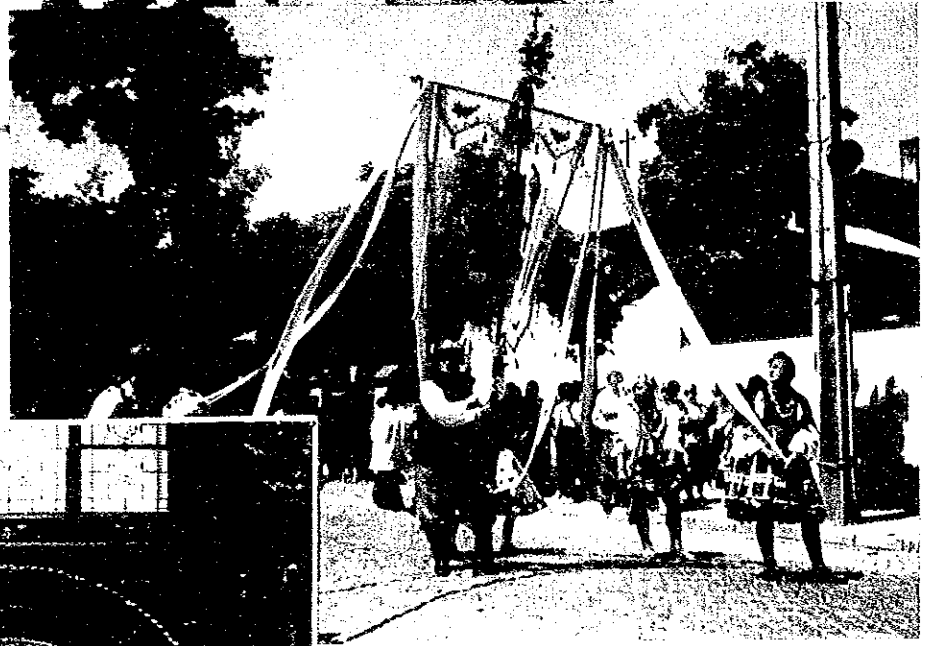
ウッジ日本文化週間、開
会式で日本の歌をうたう
ママさんコーラスグループ

オポーレ 日本語
サマーセミナー





聖体節



聖体節



ポーランドは、人口の95%がローマ・カトリックの信者である。

ワルシャワ大学組織図

生物学部
 化学学部
 ジャーナリズム・政治学部
 哲学・社会学学部
 物理学部
 地理学および地域研究学部
 地質学部
 歴史学部
 数学・情報学・工学部
 経済学部
 新言語学部
 ポーランド文学部
 教育学部
 法及び行政学部
 応用社会学部
 心理学部
 ロシア文学及び応用言語学部
 経営学部

英文学研究所
 ドイツ文学研究所
 東洋学研究所
 フランス文学研究所
 ハンガリー文学講座
 イベリア文学講座
 イタリア文学講座

中東学科
 アフリカ言語・文化学科
 アラブ及びイスラム学科
 中国学科
 日本・朝鮮学科
 エジプト学科
 アッシリア及び
 ヒッタイト学科
 ヘブライ学科

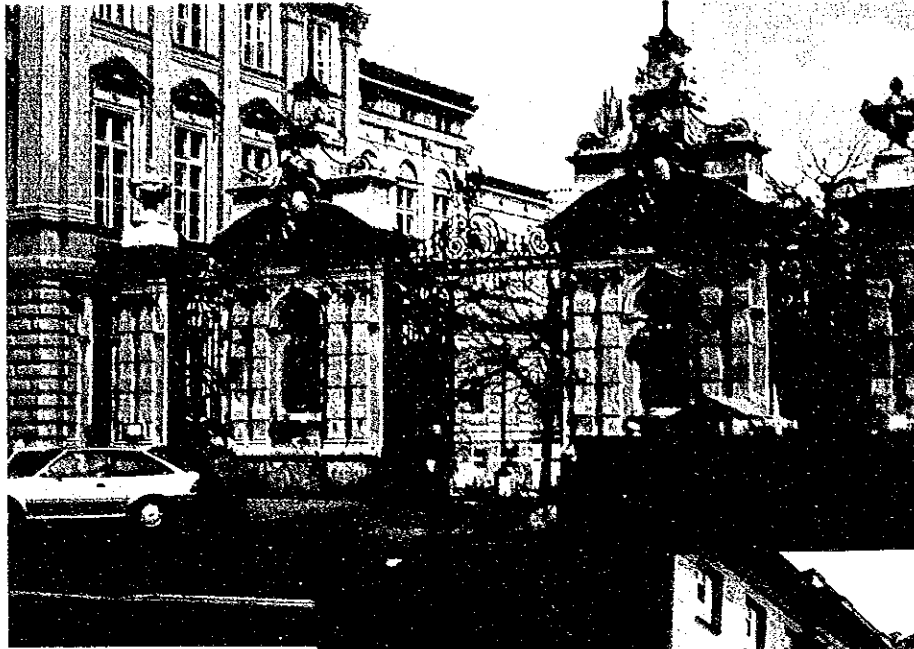
英語教員養成短大
 フランス語教員養成短大（昼間および夜間）
 ドイツ語教員養成短大

自然学部間個人課程
 環境保護学部間個人課程
 国際経営センター
 自治団体及び地域開発センター
 米国研究センター
 人文科学部間個人課程
 自治団体及び地域開発研究

〔日本学科概要〕

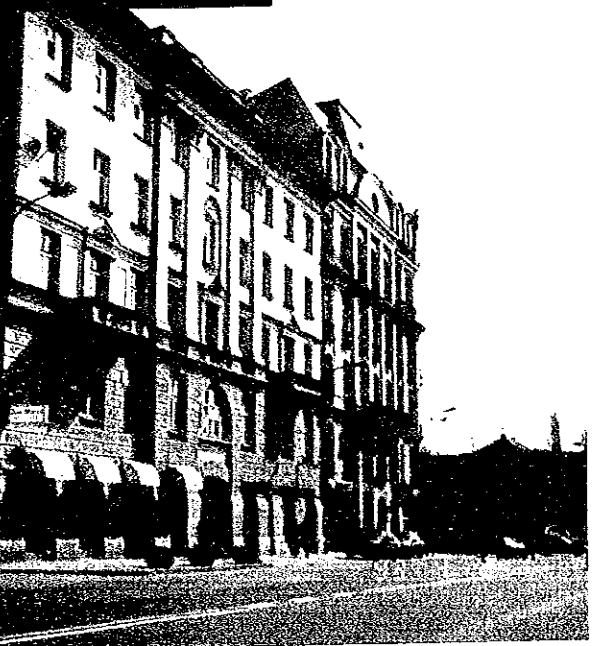
1919年開講。現在、学生数は、1年32名、2年24名、4年11名、計67名。教員数は17名（内2名、外務省出向と在日ポーランド大使のため休職中）。学生は今まで、常時3つの学年のみが在籍するように募集されていたが91/92年度から毎年の募集に変わった。

ポーランドで現在日本学科が設置されている大学としては、教師の質量ともに最も充実しており、日本語はもとより「日本学」の研究機関として、非常にアカデミックな色彩をもっている。しかし、大学で学んだ日本語・日本に対する知識を実用にかす、という点では、アジア・欧米の日本語教育機関に比べて遅れており、今後は、他の学部（特に社会科学や自然科学系の）で学ぶ学生が副専攻として日本語を学習できるようにもしてゆきたいと計画している。



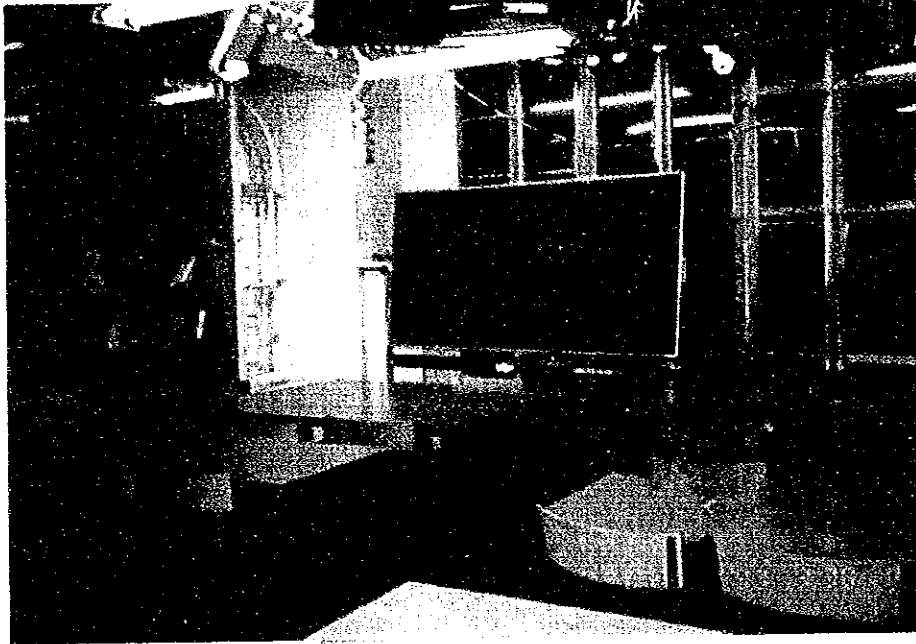
ワルシャワ大学正門

ワルシャワ大学別館



別館入口 4Fに日本学科の教室がある

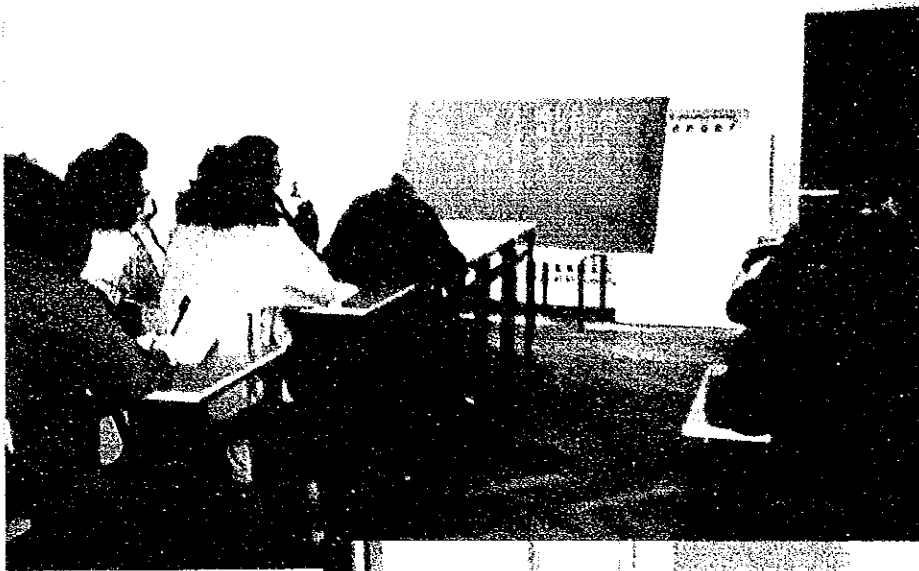
日本学科図書室



本館の教室

日本学科は女子学生が多い





シュルツ先生の会話の授業

クリスティーナ先生の授業（1年）、机と椅子が足りない



クリスティーナ・オカザキ先生の文法の授業（1年生）



ワルシャワ大学 語学研修合宿



語学研修合宿

沿革

- 1919 初めて日本語コースが開かれた。ライプチヒ大学を卒業して極東文化研究所で助手を務めていたボグダン・リヒテルが日本語教育を開始した。
- 1922 ポーランド日本協会設立。4年後日本語講座開講（学外）。
- 1933 中国学科開設。そのカリキュラムの中に日本学の科目がくみこまれた。
- 第二次大戦後 戦災で焼失した日本学関係の資料を集める作業が始まった。
- 1955 日本語および日本文化の研究課程が、日本学専攻として中国学科に附置された。
- 1968 大学制度の近代化を機に、日本学科は東洋学研究所内に中国学科、インド学科、モンゴル学科などと並んで独立した学科となった。
- 1989 大学行政組織の改編で、中国学科、朝鮮学科と合併して極東学科となった。
- 現在 中国学科が分離、日本・朝鮮学科となる。

教員

氏名	職位	専門
ヴィエスワフ・コタンスキ	名誉教授	言語学・神道・古事記
ヨランタ・トゥビエレビッチ	教授	歴史（古代～平安）
ミコライ・メラノビッチ	教授	文学（現代）
クリスティーナ・オカザキ	学科主任・講師	思想史
岡崎恒夫	講師	ワルシャワ大学で20数年の教授経験を持つ。

上記3名の教授は、講義、ゼミ専門で、語学の授業は、教授以外の者が担当している。その他、ポーランド人講師、助手10名と日本人2名。ポーランド人教官は全員、日本留学の経験がある。彼らの専門は、演劇（能、歌舞伎、新劇）、歴史（中世史、現代史、思想史）、文学（現代文学、詩、和歌、俳句）、言語学などである。

日本人教師のうち1名は、東京大学との協定により（国際交流基金が旅費を援助）毎年1名派遣されている大学教授（実際に来る教授は、東大だけでなく、北海道から九州までさまざまな大学の所属である）で、中・上級レベルの日本語教育担当。もう1名の日本人は、日本学科との個人契約によるものである。

〔カリキュラムと授業〕

カリキュラムは大きく、語学関係、日本学関係、一般教養、体育に分かれる。各科目は、学年別に配当されているわけではなく、学生のレベルと関心に依拠してかなり自由に選択することが可能である。5年間で必要な単位を修得すれば卒業が認められる。

成績は、各科目5～1あるいはA～Eの5段階評価。単位の認定は、3以上またはC以上の成績（70%）をおさめることが条件。学期の終わりごとに試験がある。試験の方法、評価の方法は各教官にまかされている。科目によっては出席、提出物も重視される。落第するものも多く、例年約30人の1年生が入学するが、2年に進級できるものは約三分の二の20人前後、卒業できるものは約10人である。

授業は初級レベルでは会話以外はポーランド語を媒介語として使用。中、上級レベルでは直接法でおこなわれる授業が増える。また卒業論文は、ほとんどすべてポーランド語で書かれる。

カリキュラム

(1) 日本語関係の科目

レベル1

現代語文法1	2コマ/週	(1コマ=90分)
日本語演習1	3	*1
漢字1	2	*2
会話1	3	

レベル2

古典文法	1	*3
日本語演習2	3	
漢字2	2	
会話2	3	
講読1	1	*4

レベル3

日本語演習3	1	
会話3	1	
講読	1	

レベル4

日本語演習4	1	
会話4	1	
講読3	1	
作文2	1	

主教材 レベル1 『初級日本語』 東京外国語大学日本語学校
レベル2 『日本語Ⅱ』 東京外国語大学日本語学校
レベル3・4の主教材および各レベルの副教材は決まっておらず、各教官の選択・作成にまかされている。

- *1 日本語演習は、定められたテキストを使って、言葉の分析（同義語、反対語を調べるなど）や表現力を豊かにするための科目。
- *2 1・2年はテキストにでてくる漢字を中心に1400字を学習する。3・4年は漢字だけの授業はなく教材にでてくる新漢字を学習する。3年で約300字、4年でも約300字で最終的には常用漢字をマスターすることを狙いとしている。
- *3 古典文法を学習した後、方丈記、徒然草、枕草子、平家物語などを読む。授業は読んでポーランド語に訳す方式（文法訳読法）。
- *4 講読1では日本語Ⅱの本文、あるいは日本事情シリーズ(日本語教育学会)をテキストにしている。2、3では古文から新聞まで、幅広く教材を取り入れ、これまでに身につけた日本語能力を駆使して、普通の日本人が読むものを読む能力を身につけることを目標にしている。

(2) 日本学関係の科目

教授の専門分野が言語学、文学、歴史の3分野なので、学生の専攻もこの3つに分かれる。

卒論ゼミ
各専攻の講義
各専攻の演習
専攻に関連した科目の講義

最近の卒業論文のテーマ

日本の象形文字－改革と見とおし／日本語の人称代名詞／短歌をポーランド語に訳す際の問題点／開高健の作品における文学的な主人公／18～19世紀の多色刷日本版画における歌舞伎／志賀直哉の作品に見られる日本の私小説の典型／宮沢賢治と子供の本／江戸の音楽文化－琴／黒沢明の作品における日本の伝統／茶の湯の美／19世紀における琉球帰属問題／1930－1975年の現代日本における宗教政治運動としての創価学会／朝鮮併合／明治時代の西欧文化の影響／明治初期の工業発展／平安時代の貴族の日常生活／1900－1947年の三井物産の活動

入学試験

ワルシャワ大学日本学科に入学するには、2つの外国語とポーランド語文法の試験を受けなければならない。外国語については、とくに制限はなく、試験官がいさえすれば、何語でも受けられることになっている。ほとんどの学生は、英、露、独、仏、の4ヶ国語から2つを選んでいますが、たまに、日本語、ラテン語で受ける者もいる。試験は、1次と2次があり、1次は筆記試験、2次は口頭試問となっている。ここ数年、日本学科は、かなりの入試倍率を記録している。

主専攻・副専攻

大学内または他大学で副専攻をとることが、2学年以降、制度上可能である。日本語だけでなく、他の専門をもった学生を養成したいというねらいがあるのだが、日本学科は必修の科目数が多く、現在のところ、実際に副専攻を持つ者はごくわずかである。

語学合宿

特色のある活動として語学合宿が毎年実施されている。これは10年ほど前、学生の提案により始まった。外部から日本人の参加者をつのり、学生と日本人が約1週間共に生活をしながら集中的に日本語を学ぶことを目的としている。合宿に参加する日本人の職業は大学教授、留学生、ピアニスト、研究者、新聞記者、商社員、大使館員、家庭の主婦、旅行者などさまざまである。また、年令、日本での出身地も多彩である。1週間をとおして参加できる人は少ないが、1日、2日でも参加できるようにして、できるだけ多くの日本人に来てもらうよう努力している。いつも、教室で教官としか話していない学生達が、全く日本語教育と関係のない、いろいろな社会的背景をもつ人達と会話することは、学習意欲を高めるうえで非常に効果がある。合宿はたいてい風光明媚な保養地でおこなうので、合宿中1日は全員でハイキングをするなど適当な息抜きも考えられている。合宿地の設定、宿舎の予約、交通切符の購入、日本人の参加者の募集などはすべて学生が担当し、合宿にかかる費用にはポーランド日本学基金の協力を得ている。

〔施設・設備〕

日本学科の教室は本館と別館にわかれており、本館は大学のキャンパス内、別館はそこからバスで10分ほどの所にある。本館は講義、別館は語学の授業がおこなわれる。教室数は本館2、別館3、収容人数は各教室とも15～20人程度。

昨年度まで、大学のLLを他の学科と共同で使用していたが、日本からの無償援助で別館に専用の施設ができる予定（1992年に完成の予定だったが、1993年5月現在、機材がまだ未着）その他の視聴覚機器としてはビデオ2セット・カセットテープレコーダー。

図書資料として蔵書数約2万冊。辞書、百科事典、文学全集（現代、古典）などから、文庫本、日本語教育関係書、日本の小説、日本学の英訳、ポーランド語訳までがそろい、ポーランドでは最も充実したライブラリーと言える。国際交流基金のLibrary supply、教材寄付を受けている。

[青年海外協力隊の派遣]

現在、ワルシャワ大学日本学科からは協力隊へ、日本語教師隊員の派遣要請がでている。要請の内容は次のとおりである。

1. 要請の背景

いままで「常時3つの学年が在籍すること」という方式で募集がおこなわれてきたが、91/92年度から毎年募集に変わり、今後、学生数が増える。それに伴う日本人教師の増員が近年の懸案となっていた。しかし、ポーランド経済の現状から、大学独自で教師を招聘することは困難である。そのため、協力隊員の派遣を要請することとなった。

学科主任、その他のスタッフとも、協力隊の制度をよく理解している。ワルシャワ大学のスタッフは優秀な人材が揃っており、カリキュラムもしっかりしているので、協力隊の協力活動に障害はない。

2. 協力隊員の担当講座および必要な技術レベル

ポーランド語をもちいる初級レベルの授業と、かなりポーランド語能力が必要な講読以外の授業。すなわち、会話、日本語演習、作文、漢字など。初級から上級の日本語教育全般。

隊員は最低限、日本語教授法と日本語についての知識が必要。教師として教壇に立った経験（他の科目の教師としてでもよい）があればなお望ましいが、大学側には、すでに十分な経験を積んだスタッフが揃っているので、ひとりよがりな知識をふりまわさず、ワルシャワ大学のやり方を学び、彼らの不足している部分を手伝う、という姿勢が必要。逆に経験者から学ぼう、という素直な気持ちがあれば、初心者でも十分に活動ができると思われる。

3. 隊員の地位

非常勤講師。住居としてはワルシャワ大学の外国人教員宿舎（ソクラテス・ホテル）を与えられる。バス・トイレ、ユニットキッチン、家具付のワンルーム（机、ベッド、テーブル、ソファ、タンス、本棚）計30～40m²。市の南部にあり、大学まで市電と徒歩で約40分。

[授業見学記録] 見学者； 柏木 由美子

科目	会話
学年	2年 10人
教師	スウォボミール・シュルツ
教科書	Intensive Course in Japanese Intermediate 第7課 (Japanese Language Promotion Center)
日時	1993年3月8日(月)

授業の進行

1、挨拶（1分）

2、盆と正月（復習、10分）

意味、何をするかを学生に説明させる。

交通機関はどうなるか説明させる。

3、うちのつく言葉の説明（10分）

うちこむ、うちきる、うちかつ、うちまかす、

うちとる、うちとける、うちあける

4、テープを聞かせる。（10分）

1回目

2回目 指示を与える。

何人の会話か。

話者の身分は？（それを知る手掛かりは？）

知らない言葉はあるか。

与えた指示のチェック

わからなかった言葉の説明

臨時電車、停電、超満員

さばききれない→さばく+きれない

他の例をあげる たべきれない、よみきれない

5、テープを区切りながら細かく説明（10分）

6、「盂蘭盆」「餓鬼道」を学生に説明させる。（10分）*これは宿題だったようだ。

7、テープをもう一度聞いて、読ませる。

（語句、表現の確認をしながら）（40分）

辞書を丸写ししただけのような難しい説明をした学生もいた。

終了

* かなり難しい内容の授業だが、学生のレベルは高く、何とか理解しているようだった。教師の側も、授業に対する用意周到な準備をしている。しかし、会話の授業としては、学生より、教師が話している時間が多い。

この続きの授業では、お盆に相当するようなポーランドの習慣（11月1日 死者の日）をテーマに、日本との比較をしながら、話し合いがなされた。

科目 文語文法

学年 2年 12人

教師 クリスティーナ・オカザキ

教科書 平家物語 有精堂 稲村徳

日時 3月9日 9:00~10:30

文語文法は、学年の始めに学習している。

授業は文法訳読方式。学生に読ませて、文、単語の意味を確認しながら全体の解釈をする。1コマの授業で、文章を3つほど読む。かなりの量、消化不良にならないのだろうかと思う。

平家物語のほかには、方丈記、枕草子、西鶴などを読む。

試験は、ポーランド語への翻訳で、辞書持ち込み可。

*観察したこと

*月曜の朝1番の授業は出足が悪い。

始めは学生は4人しかいない。

20分ほどすると全員揃う。

*授業はほとんど日本語だが、学生が理解できないときはポーランド語を使用。

科目 日本語演習
学年 1年 15人
教師 岡崎恒夫
教科書 初級日本語 東京外国語大学 1.7課
日時 3月24日 10:30~12:00

出席確認 挨拶

ポーランド語をいって日本語に訳させる。

例 この荷物は軽いから1人ではこべます。

映画を見にいきましたが、見られませんでした。

教科書の会話文を読む 教師が模範朗読

学生が読んで、訳す

会話の内容についての質問

練習 見えます、聞こえます、

臭いがします、味がします、音がします

科目 漢字
学年 1年 16人
教師 スウォボミール・シュルツ
教科書 教師の自作
日時 3月26日 9:00~10:30

ポーランド語で漢字の意味、部首の名称、熟語などの説明をしていく。

この時間に教えた漢字 固、象、鼻、首、耳、丸、毛、足、角、界、世、頭、身、背、
低、比、力、未、末、農、独、浜、兵、汽、集、祭、術、署、
信、祖(30字)

週2コマのうち、1コマは新しい漢字の導入、もう1時間は、文を与えて漢字に直させ、
前の時間の復習、練習をする。毎週テストが行われる。

教科書にでて来る漢字は600字であるが、難易度がばらばらなのと、数が不足なため、
教師が教材を作っている。1年時には650字学習する。

3:ヤギウォ大学(言語学部東洋語学科日本語専攻講座)

[ヤギウォ大学概要]

1364年に創立されたポーランドで最も古い大学。ヨーロッパにおいても、イタリア
のボローニャ大学、フランスのソルボンヌ大学、チェコのカレル大学に次いで4番目に古
い歴史を持つ。現在6つの学部と5つの研究所から成り、学生数は約11000名、教員
は約1900名(92/93年度)東洋語学科には日本語のほかにアラビア語、トルコ語、
イラン語、インド(ヒンディー、サンスクリット)語がある。

[日本学科概要]

1987年開講。92/93年度の学生数は、1年12名、3年11名、4年12名、
5年10名の計45名。開講から4年間続けて学生をとったが、今後は原則として隔年に
募集する予定。教員数は7名。昨年度、はじめて卒業生を出した、新しい学科である。

カリキュラムとしては、ほぼワルシャワ大学の方式を踏襲しているが、本格的な日本学
を目指すには専任教師の数が少ない。ヤギウォ大学は、ヨーロッパでも有数の歴史を
誇るため、大学当局の対応が保守的で、ヨーロッパの伝統的な大学教育のなかではなじみ

が薄い「日本学」の講座をどのように育ててゆくか、というビジョンがはっきりとは決ま
っていないようだ。日本学科設立の目的と今後の展望がはっきりしていないという印象を
受ける。

沿革

- 1978～81 東洋語学科 選択科目講座
- 85～86 全学向け公開講座
- 86～87 東洋語学科 選択科目講座
- 87～ 東洋語学科日本語専攻課程学生募集開始
国際交流基金日本語教育専門家派遣開始

教員

ポーランド人 5人 日本人 2人

日本語専攻課程の責任者はワルシャワ大学と兼任のメラノビッチ教授であり、卒論指導
ができるのもメラノビッチ教授だけである。ポーランド人教官のうち、もう1人もワルシ
ャワ大学との兼任。また、残りのうち1名は昨年度卒業した第一期生である。

日本人講師のうち1人は国際交流基金からの派遣。もう1人は先に述べた、ポーランド
日本協会の吉田氏で、週3日、ウヅジから出張してくる。

[カリキュラムと授業]

日本語関係のカリキュラムと教材は以下のとおり。

1年	漢字	2コマ/週	4年	文語	1
	会話	6		翻訳	2
	文法	2		文学	1
	日本学入門	1		会話	4
				歴史	1
3年	文語	1		漢字	2
	文学	2		ゼミ	1
	会話	5	5年	会話	2 前期のみ。
	漢字	2		漢字	2 前期のみ。
	歴史	1		ゼミ	2
	翻訳	1			

1年	日本語初歩	(2年 日本語中級)
3年	Integrated Spoken Japanese	1
4年	Integrated Spoken Japanese	2

[施設・設備]

日本学科の教室は、旧市街のはずれにあり、他の学科とは離れている。

図書 蔵書数約3600冊(図書室は教員室と兼用)

教室 3(各15～20人収容)

視聴覚機器 ビデオ・セット(マルチタイプ) テープレコーダー

[青年海外協力隊の派遣]

日本学科の現在の課題は、現地スタッフの体制をしっかりとさせることにある。またすで
に国際交流基金からの教師が派遣されており、大学側はこれ以上の日本人講師は不要と考
えている。協力隊への派遣要請はない。

4: アダム・ミツキエビッチ大学 (新文献学部東洋語学科日本語専攻)

[アダム・ミツキエビッチ大学概要]

ポーランド西部の中心都市、ポズナニは、ワルシャワとベルリンのほぼ中間地点にあり、歴史的にもドイツと関係が深い。また、ワルシャワは政治都市、クラコフは文化都市、そしてポズナニは商業都市という性格をもっている。

このポズナニにあるアダム・ミツキエビッチ大学 (UAM) は、総合大学としては、ワルシャワ大学、ヤギウォ大学につぎ、ポーランドで3番目の規模をもつ。

16世紀に、大学の前身ができたが、正式に大学となったのは1919年である。

UAM組織図

生物学部

化学部

数学・物理学部

ポーランド・古典文献学部

歴史学部

地理学・地質学部

社会学部

法学・行政管理学部

新文献学部

(Katedra)

言語学・情報学部
対照言語学・東洋言語学部

中国語学科

日本語学科

リトアニア語学科

アラビア語学科

[日本学科概要]

1987年開講。現在学生数は2年生10名、4年生4名、文部省日本語・日本文化研修留学生として留学中2名、計16名。学生の募集は隔年で、每期10~12名が入学する。教員数はポーランド人5名、日本人4名。

ヤギウォ大学同様、1991年にはじめての卒業生を送り出したばかりの、新しい学科である。

大学の性格を反映してか、カリキュラムは3校のなかで一番語学教育に力をおいた構成となっている。したがって、実用的な日本語能力の養成、という点では充実しており、現実に日本政府(文部省)の留学生試験などでは、ここ数年よい成績をあげている。しかし「日本学科」として将来どのような方向を目指すのか(あくまで「使える日本語」教育を目指すのか、それともワルシャワ大学のようなアカデミックな方向を目指すのか)という点では学科内のコンセンサスがはっきり決まっておらず、ポーランド側のスタッフ育成とあわせて今後の大きな課題である。

なお、新文献学部では日本学科の他に、中国学科の学生に必修第二外国語として、また情報学科の学生には選択外国語として、それぞれ日本語のクラスを設けている。

沿革

- 1973年 言語学研究所により、全学むけ日本語講座が設けられていた。
- 1986年 情報学科を設立し、学生募集開始。日本語が非ヨーロッパ言語として、選択必修科目となる。
- 1987年 日本語学科設立。初年度入学者15名。
- 1988年 中国語学科設立、リトアニア語学科設立。
- 1991年 アラビア語学科設立。

教員

氏名	職位	専門
アルフレッド・マイェービッチ	教授	アイヌ語・民族学
エステラ・ジェロムスカ	東洋言語学部長 講師	
ロベルト・カシャ	日本語学科主任 講師	

他に、ポーランド人スタッフ1～2名（ワルシャワ大学との兼任講師）および大学との個人契約による日本人スタッフ4名。

まだ始まったばかりの学科ということもあり、教師の層がうすいのが、最大の問題である。ポーランド人のスタッフが確保できないため、マイェービッチ教授が、個人的なつてを頼って日本人講師をよび、学科を運営している。日本人講師のほとんどはポーランドあるいは、スラブ文化圏に関連した研究者で、中には博士号をもつ人もいるが、日本語教育についての専門家・経験者は一人もいない。

現在、この学科の第1期生が2名、日本に留学しており、2年後には彼らもどってくる予定である。しかし、卒業生の中から、この学科を運営してゆくのに十分なスタッフが育つまで、あと5年～10年は必要であろう。また、大学の財政事情が好転しない限り、スタッフの増員は難しく、当分は隔年の学生募集が続くと思われる。

〔カリキュラムと授業〕

まだ1回しか卒業生を出しておらず、コース・デザインやカリキュラムは確立したものではない。履修科目の一覧は以下のとおりであるが、各科目の内容は教師に一任されており、具体的な日本語教育のすすめかたについては、今後の課題である。

教科書は、東京外国語大学の「日本語Ⅰ・Ⅱ」を使用、その他、教師の判断で他の教材をとりあげる。漢字の授業については、教師が自作した教科書。翻訳についてはポーランド人教師と日本人教師（どちらの教師も、相手の言語について精通している）が共同で実施し、かなりレベルの高い授業をおこなっている。

なお、日本語演習については、1学年を2グループにわけて（5～6名）授業をしている。基本的には直接法で行うが、文法・語句説明についてはポーランド語も使う。卒業論文は、学科長のマイェービッチ教授の専門がアイヌ語であることも手伝って、アイヌ関係の論文がみられるのが特長といえる。しかし、学内に資料が揃っておらず卒論指導が困難である。テーマによっては、他の学科や大学の教師に指導を受けにゆくことも認めている。

カリキュラム

学年	科目名	時間数/週（前期・後期）	
1 学年	日本語演習（演習）	1 4	1 2
	漢字（演習）	3	4
	日本語記述文法（講義）		2
	日本事情（講義）	2	2
	言語学入門（演習）	2	
	論理学（演習）	2	
	現代哲学（講義）	2	2
	ロシア語（演習）	2	2
	英語（演習）		4

	体育	2	2
2 学年	日本語演習（演習）	1 4	1 2
	漢字	4	6
	日本語記述文法（講義）	2	
	日本文学・文化史（講義）	2	2
	翻訳（演習）		2
	情報理論（演習）	2	2
	心理学（演習・選択）	2	2
	第二東洋語（演習）	2	2
	英語（演習）	4	4
	体育	2	2
3 学年	日本語演習（演習）	1 2	1 2
	漢字（演習）	3	3
	翻訳（演習）	2	
	日本語読解演習（演習）	3	3
	日本文学・文化史	2	
	修士論文ゼミ		2
	第二東洋語（演習）	2	2
	英語（演習）	4	4
	選択教養科目・特別講義		
4 学年	日本語演習（演習）	8	8
	漢字（演習）	3	3
	日本語読解演習（演習）	4	4
	日本語歴史文法（講義）	2	2
	修士論文ゼミ	2	2
	第二東洋語（演習）	2	2
	英語（演習）	4	4
	言語教育学概論（講義・選択）	2	
	特別講義		
5 学年	日本語演習（演習）	6	6
	漢字（演習）	4	
	日本語読解演習（演習）	3	
	修士論文ゼミ	2	2
	第二東洋語（演習）	2	
	英語（演習）	4	4
	特別講義		

卒業論文のテーマ
大嘗祭／日本人のポーランド語／浮世絵／三島由紀夫／アイヌの村ー過去と現在／日本
の北方領土の植民地化

[施設・設備]

日本学科を含めた、新文献学部の教室は、市の西側の住宅地の一角にある。日本学科が専用で使える教室は2つのみで、学生が隔年募集ではあるとはいえ充分ではない。収容人数も各教室10名程度。学生の個人指導や教師の打ち合わせは、喫茶店か廊下でおこなわれている状態である。

図書室は、同じ建物に学部共用のものがある。こちらも狭く、また蔵書数も3000冊ほどと、やっと基礎的な参考図書がそろった段階である。

視聴覚機器も、テープレコーダがあるだけで授業はほとんど教師の手作り。しかし、現在、日本政府の文化無償援助でLL教室が寄贈される予定がある。この話が決定すれば、日本語学科(にとっても、他の学科にとっても)の教育を充実させるうえで、大きな力になるだろう。大学側としては、LL教室としてはもちろん、視聴覚教室としても使える施設を望んでいる。

[青年海外協力隊の派遣]

UAMからも協力隊への、日本語教員派遣要請がでている。内容は以下のとおり。

1. 要請の背景

(1) 日本学科は設立から日も浅く、まだ、ポーランド人スタッフが育っていない。現在は、日本人スタッフに教育のかなりの部分を頼らなければならない状態である。幸い、個人契約で何人かの熱心な日本人教師を確保しているが、中国学科などの日本語クラスを含めて、十分な人数を常に確保してゆくのは難しい。

(2) 現在の日本人スタッフは日本語教育については初心者であり、今後の学科の発展のためには、専門的知識と経験をもった教師を招聘してカリキュラムを確立する必要がある。

(3) 現状では、大学事務局が日本学科の必要性について、まだ十分な認識をもっているとはいえない。協力隊の派遣は、日本政府が日本学科に関心をもっていることを、具体的なかたちで示すことになり、ポーランド側の協力体制をつくるうえでも大きな役割を果たす。

2. 協力隊員の担当講座および必要な技術レベル

ポーランド語を使って教えている「漢字」と「翻訳」以外の授業。日本語教授法の知識はもちろんだが、何よりも、教師として実際の語学教育にたずさわった経験が必要。カリキュラムや授業法の改良についての提言が求められる(もし、LL教室ができたときはその有効な利用法を同僚教師・学生に教えることもまかされる)日本史や日本文化について、学生からの質問に答えられる程度の基礎的知識があり、英語またはドイツ語がある程度できるとより望ましい。日本人スタッフのなかで、協調性をもって仕事ができること。

3. 隊員の地位

非常勤講師。住居としては、UAMの外国人教師またはアシスタント用の宿舎が与えられる(トイレ・シャワー・台所は、共同で使用することになる場合がある)。

家具・ベッドは部屋に備え付けられているが、洗濯機などは自分で購入する。宿舎は数箇所あるが、いずれも日本学科の校舎からはかなり遠い。バス・市電で通勤する。

なお、現在、UAMの教師には全員、ポーランド国鉄の無料パスが支給されている。

5: ミコライ・コペルニクス大学 (UMK)

[コペルニクス大学概要]

ポーランド中部、トルン市にある。トルンは、クラコフとならびポーランドで最も古い町並みを残した小さな街であり、ドイツ騎士団によって建設され、ハンザ同盟の都市でもあったため、独特の雰囲気は今に残っている。同時にポーランドの誇る天文学者コペルニクスの生誕地でもある。大学名は彼の名を記念してつけられ、ポーランドで唯一の天文学部を持つのもそのためである。

大学の前身は、16世紀にビリニウスにつくられたが、戦後、数多くの教授と共に、トルンへ移転した。そのため、古い伝統と、新しい精神が調和したユニークな校風を持つ。現在、6つの学部から構成されているが、ポーランドの総合大学としてはめずらしく、自然科学系の学部の評価が高く、また美術学部を持つ。

大学組織図

人文学部

ポーランド文献学研究所
歴史・古文書学研究所
教育学・心理学研究所
考古学・民族学研究所
古典文献学講座
ゲルマン文献学講座

法律・行政管理学部
行政官理学研究所
自然法学研究所
民法学研究所
刑法学研究所

自然経済学部

(研究所=Instytut 講座=Katedra)

数学・物理・化学学部

数学研究所
物理学研究所
化学研究所
天文学研究所
(付属天文台)

生物・自然地理学部

生物学研究所
地理学研究所

美術学部

美学教育学研究所
文化財・修復学研究所

[コペルニクス大学における日本語教育]

コペルニクス大学では、数年前より、名誉教授のロマン・インガルデン博士(博士の専門は数理物理学)の指導のもとに、自主ゼミの形で日本語教育がおこなわれてきた。専門家が一人もいない状態での日本語教育にはかなりの困難があったようだが、このほど青年海外協力隊から日本語教師派遣がきまり、新年度(93年10月)から、全学部の学生を対象とした選択外国語科目の一つとして日本語の講座が開設されることとなった。非ヨーロッパ系の語学科目が開設されるのは、コペルニクス大学としては、はじめてのことである。

とくにコペルニクス大学では日本学科の新設を目標としているのではなく、外国語教育のひとつとして、日本語教育を進めてゆきたいと考えている。自然科学系・美術系の学生が新たな研究に取り組む際、日本から発信された情報を知ることが、これからは一層、重要になってゆく、という考えからである。このような、ポーランドでは今までになかったかたちの日本語講座が発足することは特筆されてよい。

ただし、大学側の体制づくりはこれからの課題となる。カウンターパートの養成からカリキュラムの作成まで、赴任した協力隊員は、かなりの仕事をこなさねばならず、今後ポーランドの他の大学に派遣された日本語教師隊員の協力が必要になると思われる。

なお、このほどおこなわれた学長・副学長の改選で、日本を含めた世界の広い地域との学術交流をかねてからとなっていた人物が当選した。日本語教育にも積極的な考え方の持ち主であり、協力隊員の活動にも、よい結果をもたらすと思われる。

6: ウッジ大学・ウッジ工科大学

ウッジ工科大学では1984年から、ウッジ大学では1991年から学内の自主講座として日本語が教えられていた。(現在はどちらも経済的な理由で中断されている)

また、ウッジ工科大学はポーランド日本協会ウッジ支部の設立母体ともなっている。日本との関係強化に熱心な指導者がおり、以前、日本語の正式な講座を開設しようと、ポーランド文部省に申請をだしたこともある。(当時はまだ社会主義体制のもとで、文部省の監督権限が強く、工科大学では日本語教育の必要はない、と却下されたとのことである)

今後、どちらかの大学から協力隊の要請がだされる予定。協力隊が派遣されれば、どちらの大学も日本語コースを再開したいと考えている。その場合、1校が受け入れの責任をもつが、実際の仕事は両校の講師を兼任するかたちとなる。

[ウッジ工科大学]

ウッジ工科大学は、1945年に創立。ポーランド第二の都市、ウッジに本校、南部の小都市ピエルスコ・ビヤウワに分校をもつ。

12学部、教職員1400名、学生9253名、ポーランド最大の工科大学である。

学部は機械工学、電気・電子工学、化学・繊維工学、食品工学・生物工学、建築・土木および環境工学、応用物理・応用数学、経営・システム工学、食品加工・環境工(以上ウッジ本校) 機械デザイン、繊維・環境工学、経営・システム工学(以上ピエルスコ・ビヤウワ分校)



トルン コペルニクス大学 左から3人目がインガルデン教授



浮世絵を鑑賞するワルシャワ大学の学生
ヴィラノフのポスター美術館にて

[3] ポーランドの日本語教育—その課題と展望—

前章では、主に制度的な面から、ポーランドの日本語教育を見てきたが、ここでは、日本語教育を内容的な面から分析し、あわせて今後のポーランドにおける協力隊活動について探る。

1: 学生の立場から

[なぜ日本語を学ぶのか]

UAMで日本語を学んでいる学生（2年生10名・4年生4名、男女比は8:6）の、日本語を学びはじめた動機と目的は次のとおりである。

(1) あなたはなぜこの学科に入りましたか？

なぜ日本語を選びましたか？

日本の文化にあこがれて	4名
武道をやっていて、日本に興味をもった	6名
他の人がやらない言葉をやりたかった	2名
なんとなく	2名

調査は、会話の授業中に、日本語でおこなったため（とくに2年生は）やや答えるのが難しかったかも知れない。ポーランド語で個別に質問すれば、もう少し突っ込んだ回答が返ってきた可能性はある。性別による回答の差はなかった。武道の種類は、柔道が2名、空手が2名、柔術が2名であり、いずれも高校時代に市民サークルに参加していたものである。

同じ質問を、UMKの自主講座で日本語を学ぶ学生にしたところ、調査の対象となった6名中、4名まで武道（空手3名、合気道1名）が日本語学習をはじめた動機であると回答した。残りの2名中1名は美術学部の学生で、日本の美術に対する興味から、1名は社会人であるが「仏教に興味をもって」というのが日本語学習をはじめた動機である。

(2) 日本語を勉強して、これから何をしますか？

卒業後、何をしたいですか？

日本への留学を希望	4名
日本語を活かせる職業につきたい	2名
まだ、わからない	8名

この回答には、やや説明が必要である。偶然、日本への留学生試験の2週間前に質問をしたため、4年生の受験予定者3人が「留学を希望」と回答した。そのため、2年生に対しては「卒業後、何をしたいですか？」という質問を強調したのだが、それに対しては「まだ、わからない」という答えが返ってきたものである。

おそらく、この質問に対しての標準的な回答は「もちろん、できることなら日本へ留学したい。将来は日本語を活かせる仕事、たとえば日系の企業に就職したい。しかし、留学生試験に合格するだけの自信はないし、日系の企業に入るチャンスはほとんどないだろう（ポーランドに進出している日本企業はごくわずかで、しかもワルシャワに集中している）…したがって卒業後については、まだ、わからない」というところだろう。

UMKの学生に対しておこなった同じ質問でも、卒業後、日本への留学を希望する学生が3名いた。そのうち1名は美術学部の学生で「日本で版画の勉強をするため」1名は天

文学部の学生で「日本の天文学は世界でもトップレベルにあるので、日本で博士論文を書きたい」という。また、残りの2名は、日本語を本格的に勉強したいので、ワルシャワ大学に進学予定（というと、日本人は奇妙な感じをいだが、Ⅱ章で述べたとおりポーランドでは複数の大学にゆくことは珍しくない）である。

以上の回答から判断する限り、ポーランドの学生は日本語を学ぶにあたって、それほど強い動機や目的をもたず、かなり漠然とした「あこがれ」によって日本語を選択しているようだ。これは、はっきりとした動機と目的をもって日本語を選択する東・東南アジアの学生とはきわめて対照的である。

アジアの日本語教育は、日本語を学ぶことが、直接将来の生活に役立つ…日本語を話せると金銭的に有利な職業につける…という現実には支えられている。これらの地域では、日本語は英語やフランス語と同じ単なる外国語の一つである。しかし、現在のポーランドでは、日本語を活かせる職業はごくわずかであり、日本語が話せても活躍の場がほとんどない。したがって、ポーランドでは日本語はまだ「外国語」ではなく、きわめて特殊な学問の一分野にとどまっておき、それが学生の回答にあらわれている。

その点、他に専攻を持ち、その専攻に日本語の知識を活かそうと考えている学生の方が、日本語学習に対して、具体的な目的を持ち易いと思う。日本語を専門的に学習しているUAMの学生より、他に専攻を持ちながら、日本語を勉強しているUMKの学生の方が、日本語学習にはっきりとした目的を持っているようである。

[日本語は難しいか]

つぎに、日本語の学習そのものについて質問した。質問はやはり授業中に日本語（一部は英語）で、インタビュー形式でおこなった。

(3) 日本語は難しいですか？

とても難しい	0名
難しい	2名
それほど難しくない	10名
やさしい	2名
とてもやさしい	0名

UAMの学生の回答は、上のおりである。難しいと答えた学生は2名とも2年生であった。また、UMKの学生も、ほぼ同じような意見を持ち「今は、専門の勉強が忙しく、日本語に十分な時間がとれないので進歩が遅いが、日本語そのものはそんなに難しいとは思わない」という答がほとんどであった。

(4) 日本語のどんなところが難しいですか？

「日本人は話の相手や状況によって、会話のやり方を変えるが、それをどのように使い分けるか判断がむずかしい」

「人にものを頼んだり、断ったりするときの言い方が難しい」

「やりもらい（授与動詞）の表現」

「文章の中の『もの』や『こと』という形式名詞の使い方や意味がわからない」

「指示語（これ、それ、この、あの…）が何を指しているのかわからないことがある」

「会話の中で、修飾節（関係代名詞節）が、被修飾語の前に来るので、話を聞いているうちにとどきどきわからなくなる」

「漢字の読み方—意味はわかっても読み方がわからないことがある」

「単語の数が多くて、辞書にでていない言葉がある」

上の2つは、いずれも待遇表現（敬語の使い方・言葉遣い）に関する問題である。ただし、回答はすべて「敬語の文法的側面が難しい」といっているのではなく「どのような場合で、どのような相手に、どの程度の敬語を使うのか」という運用面に関する難しさを指摘しているものであった。また授与動詞についても「やる」「あげる」「差し上げる」、「くれる」「もらう」「いただく」などといった、待遇表現にからんでの使い方が、会話の中でとっさにでてこないという問題である。

ただしこれは、ポーランド人学習者が敬語を使うのが下手だ、ということには直結せず、むしろ逆である。一般にポーランドの人々は、上手に敬語を使うし、また表現が「失礼に」ならないかとても気にする。筆者の推測では、ポーランド社会は、日本と同じく人間関係の粗密を重視する社会なのではないか、と考える。ポーランド語に暗いため、はっきりとしたことはわからないが、おそらくポーランド語にも何らかの敬語的な表現が発達しているのではないかと思う。そのため、学生は日本語における待遇表現の重要性に直感的に気づき、それを日本語の難しさ、ととらえるのではないか？ ちなみに、ポーランド人と交際することは、それほど難しくなく、日本の常識の範囲内で十分にポーランドの人々を理解できる。両国民のメンタリティには近いものがあると思われる

つぎの3つは、日本語とポーランド語の違いを表現している。ポーランド語は、日本語と同様、かなり語順の自由な言語であるが、格変化と屈折が発達しており、修飾語と被修飾語の関係をそれで明示する。日本語にはそのような変化や屈折がなく、助詞や、形式名詞、指示語を使って表現するので、長い会話や文章にであったとき混乱するらしい。（学生は、ほとんど2つ以上の外国語を修得しているが、いずれもヨーロッパの言語である）最後の2つは、日本語の辞書や参考書が不足している現状を示している。

(5) 日本語のやさしいところはどこですか？
勉強していて楽しいところはどこですか？

「文法はやさしい」

「動詞や形容詞の変化が単純で覚えやすい」

「助詞や助動詞、補助動詞が発達していて覚えるのは面倒だが、精密な表現ができるのはよい」

「日本語は論理的な言葉だ」

「外来語はポーランド語（の中の外来語）と共通している言葉が多くてわかりやすい」

「発音もすべてポーランド語にある音なのでやさしい」

「漢字は難しくない。覚えるのは楽しい」

「日本人と日本語で話ができるとうれしい」

ポーランド語はインド・ヨーロッパ語族の中でも難しい言葉とされており、ポーランド人にはそれを自慢しているようなところがある。それが「日本語は難しくない」という余裕(?)につながっているのだろう。また、日本人が難しいのではないかと考える独特の表記法（かなと漢字）についてもほとんどすべての学生が「好きだ」と答える。これらは理論好きで、抽象的なものをおそれないポーランド人の性格をよく表している。そして、最後の回答にあるように、ポーランドの人達はおしゃべりが好きである。学生たちと話していると、ときにとっても面白い話をしてくれることがあり、自分もこんなふうに外国

語を話せたら、としばしば感じた。

[日本学から外国語教育へ]

以上の質問をまとめてみると、ポーランドの学生は、けっして日本語を難しい言葉とは考えていないし、勉強することを楽しんでいるようである。しかし、一方では「なぜ勉強するのか」「勉強してどうするのか」というはっきりとした目的意識を持っておらず、これがポーランドの日本語教育の最大の弱点になっている。ポーランドでは、日本語を学ぶことは、合気道や空手を学ぶことと同じレベルの「趣味」にとどまっているようである。

ポーランド人は、すべて日本のものを「珍しい」「エキゾチックだ」「我々とはちがう」というレベルでかたづけしてしまう悪い癖があるように思う。たとえば、今、経済改革が必要なポーランドでは、日本の経済的発展について、もっと分析的、科学的に研究する人がいてもいいのに「日本の成功は文化の違う我々のモデルにはならない」という、一言でかたづけられてしまっているようだ。

ポーランドにおいて、日本語教育は、日本学の研究手段の一つでしかなかった。しかも、その日本学は、現代的な（もしくはアメリカ流の）Japanese studyではなく、古典的な（19世紀、ヨーロッパ流の）Japanologyであり、その考え方はいまでも強い。そのため、日本語を学ぶことが、一部の特殊な人々の趣味に終わってしまっているのである。

しかし、UMKのインガルデン教授（数理物理学者）は、次のように言っている。

「科学の世界において、すでに日本は特殊な地域ではなく中心の一つである。科学者にとって日本はアメリカや西ヨーロッパと同じ意味をもつ存在であり、いわば日常的な存在である。にもかかわらず多くのポーランド人科学者は日本を特殊な、自分たちとは関係のない地域としか考えていない。しかし、私は過去の自分の経験から、日本人科学者は我々と同じように考え、同じように研究することを知っている。しかも、その研究はすぐれたものである。

ポーランドが、これから発展してゆくためには日本との関係を強め、すぐれた部分を学んでゆかねばならない。語学教育について全く門外漢の私が、日本語教育をはじめようとしたのは、一種のプロパガンダである。若い学生たちが日本語を学ぶことによって、日本がアメリカやドイツと同様、身近な国の一つになることが第一の目的である」

教授のように考える人は、まだポーランドではごく少数であるが、数少ないこのような人物を見つけだし支援してゆくことによって、日本語教育は、日本学から外国語教育へ発展してゆくのだと思う。

2：教師の立場から

[ポーランド人学生の特長]

短い滞在、しかもポーランド語ができない報告者が、一般化して延べることは危険であるが、つぎのような傾向があると思われる。

1. 読むことよりも話すことに興味をもつ

ヨーロッパの人々一般に言えることだが、外国語の学習に際しては「読む」「書く」ことよりも「聞く」「話す」ことが先行する。

2. 文法に対する関心

ポーランド語が文法を重視する言語であるためか、文法に対する関心が強い。覚えなければならない文型や表現型も、単にその意味をきいて終わるのではなく、文法的な説明を求める。説明するときは、なるべく論理的に、また一般化・抽象化して説明したほうが納得するようだ。説明が不十分な場合、学生はその語にとらわれなかなか授業が進まないこ

ともよくある。

3. 形式よりも内容

ロール・プレイによる会話練習などの際、具体的に内容のある話題を取り上げないとうまく進んでゆかない。日本人の場合は会話の内容に意味がなくても「この形式をマスターすることが大切」と考え努力するのだが、ポーランド人は「こんな形式よりも内容が大切」と考えてしまい、つまらないシュチュエーションを設定したときなど、絶対に素直な会話をしようとはしない。したがって、パターン・プラクティスのドリル（入れ換え練習）などをやらせると退屈でたまらない、という表情を露骨に見せるし、教科書の暗記などは死んでもやらない。逆に何らかの話題について、具体的な説明や解説、また個人的な意見を求めると、非常に熱心に、ときにユーモアや皮肉をまじえながら話しはじめ、授業が思わぬ方向に進むこともある（とくに男性にこの傾向が顕著である）。

4. 自宅より学校

自宅（教室以外）で熱心に予習・復習するという習慣はあまりない。宿題をだしても、指定の期日までに提出することは少なく、何度か請求をくりかえす必要がある。

5. 試験

試験をひかえて猛勉強をはじめる、ということはあまりないようだ。試験のときのカンニングはあたりまえで、ある日本人教師によれば「監督しているこちらが恥ずかしくなるくらい、露骨にやる」

6. 漢字と外来語

よい辞書が手に入りやすく、特に初学者は苦労しているようだ。

しかし、前項で述べたとおり「漢字は難しい」という意識はない。教科書の中ででてくる漢字を随時、とりあげるよりは、まとまった時間に漢字の型・意味・読み方・熟語をまとめて覚えるほうが好まれるらしく、ほとんどの大学で「漢字」の時間を作っている。

言語の中には借用語（外来語）に対してきわめて厳しい態度をとる言語と、寛容な言語がある。前者の代表は中国語やフランス語であり、後者の言語の代表は日本語や韓国・朝鮮語であるが、ポーランド語もまた外来語に関しては、きわめて寛容な言語である。ポーランド語の中にも多くの外来語があり、しかも、なぜか日本語と発音、意味内容ともよく一致する単語が多い。したがって外来語は、ほとんど辞書の助けなしに理解ができるようだ。

[どのように教えるか？]

最悪のパターンと考えられる教え方は、つぎのようなものである。

完全な直接法を使い、授業中はポーランド語を使うことを禁ずる。初期の段階で発音を徹底的に矯正し、なめらかさを追求してパターン練習をくりかえす。また教科書にでてくる基本文型は例文と共に暗記することを求める。会話練習にはロール・プレイング・ゲームをとりいれ、日本にいるような状況を設定して流暢さを要求する。授業中はやさしく、しかし試験は厳格に…。

…という、おそらくは、日本語教育の最もスタンダードなパターンが、この国では、最悪の教授法になる可能性がある。おそらく、このような授業をすれば、学生の大半は飽きてしまい、教師はいらだち、ロールプレイングゲームで、郵便局に手紙を出しにきたはずの学生が突然強盗に変身してしまったのを茫然とみまもる…ということになるのがせきのやまである。ポーランドの学生は我々が予定している方向へはけって動いてくれない。

*ポーランドの学生は、我々が暗黙の了解のもとに行っている（と考えている）授業の流れを理解していないわけでは（もちろん）ない。彼らは、このよううそっぽい授業の流れを大人の目で批判し、子供っぽいやりかたでひっくり返してみせるのである。このよ

うなポーランド人の反応を、ある人（彼もまたポーランド人である）はこのような例をひいて語った。

「数年前、学校内で喫煙する中学生の増加が全国的に問題になった。政府は子供の禁煙キャンペーンを展開したが、煙草を吸う生徒の数は増えるばかりだった。ある校長がこう考えた。『ポーランド人は禁止されたことをやりたがるへそまがりな民族だ。では、奨励したらやらなくなるのではないだろうか？』そこで彼は、校内に喫煙所を設置して、この場所ではおおいに喫煙してよろしいということにした。生徒たちは喜んでおおっぴらに煙草を吸いはじめた。しかし…2カ月もたたないうちに、その学校で煙草を吸う生徒の数は激減した。これ以降、ポーランドの中学校では、喫煙所を設置することが常識となった」

*

ポーランドでの日本語教育では、教師がポーランド語の知識を持っているか、ポーランド人教師と組んで授業を受け持つほうが効果があがる。

ポーランド語は、発音と語順については自由度が高く、屈折と格変化に関しては厳密な言葉である。この母語の影響を受けてか、外国語を学ぶときも、はじめから完全な直接法でパターン練習などをくりかえしても学生はどこか物足りない気持ちもち、同時に退屈してしまうらしい。最初に日本語の文法的説明をポーランド語ですること！ 学生はとりあえず話せなくとも、日本語を文法的に理解できたことで満足する。その際、助詞と助動詞の意味をしっかりと教えておくと、かなり早い時期から文型にとらわれず話すことができるようになる。逆に、なめらかさをもとめて、教科書の文型（例文）の暗記を求めたりしても、けっして学生は努力して暗記したりなどしない。

つまり…

1：直接法はむずかしい＝直接法で文法の原則までも理解させることは普通の教師にはできない。ポーランド語または、何らかの媒介語（ロシア語、英語、ドイツ語）を使うほうが効率的。

2：最初に文法を教え、語順・文型の暗記はさせない。

3：発音はうるさく矯正してもむだ。幸いに日本語にある発音で、ポーランド語ない音はない（厳密に言えば、ただ一つラ行音はない。舌を震わせるR音で代用してしまう学生が多い）慣れるにしたがってうまくなってゆく。なお、文字教育と関連して、ごく初歩の段階で「し」「ち」「じ」「わ」の音が混乱する学生がいる。これはポーランド語の表記法の影響をうけているため、これらの音はポーランド語ではそれぞれ s z · c z · d z · l a で表記される音（に近い）と一言説明すれば簡単に理解してもらえる。

文字（特に漢字）は、学習の進度にあわせて小出しにするより、はじめに常用漢字（や学習漢字）の表を提示して、これだけの漢字を覚えなければならない、と挑戦的にせまっていたほうが意欲をかき立てる。ただし、漢字の習得に関しては…

4：漢字は書いて覚える

…という原則を徹底する。ポーランドではあまり書いて覚えるという習慣がないようだが、漢字はとにかく自分で書かなければ覚えられない。このとき、書道を授業にとり入れることがきわめて効果的である。武道がポーランド人に広く普及しているのと同様、書道も日本の伝統的芸術として、関心を持たれている。

会話の練習は…

5：最初に自由に発言させる

とにかく、学生が興味をもちそうなことを教師が提起して自由に語らせるほうがよい。わざとらしい状況を設定して決まりきった会話の練習をすることは、ポーランド人学生の

最も苦手とするところである。ひととおり学生が話したあとで、細かな指導をすること。自分が話したことについて、教師が誤りや、よりふさわしい言い方を教えるときには、学生はとて注意深く耳を傾ける。

以上、述べてきたことでわかるとおり、ポーランドの学生は決して先生の言葉に素直にしたがう「よいこ」ではない。どちらかというところ「へそまがり」である。しかし、このポーランド人の「癖」をのみこんで授業ができるようになったときには「偏差値」に洗脳された日本の学生にはできない、創造的な授業ができる。

〔教科書と教材〕

教科書や教材は不足している。質についても大きな問題があるが、量についての問題が当面の問題である。辞書も教科書もポーランドで発行されたものは、ごく簡単な単語集と会話帳（ローマ字表記）以外にはない。

まず、辞書について…現在、唯一刊行された本格的なポーランド語-日本語辞書は、白水社の『ポーランド語辞典』があるのみである。この辞書は収録語数22000語、ポーランド語名に「ポーランド-日本語小辞典」とあり、最少必要限の言葉に限った辞典であるが、ポーランド語を学ぶ日本人だけではなく、日本語を学ぶポーランド人からも高い評価を得ている。しかし、日本で刊行された辞書なので、ポーランドでは入手できないし、また高価でもある。そして、日本人むけに作られた辞書であるためポーランド人の初学者には難しい。一方、日本語-ポーランド語の本格的な辞書はまだない。現在のポーランド大学生はロシア語ができるので、旧ソ連発行の露和・和露辞書と、英和・和英（または独和・和独）辞書を併用している人が多い。

次に教科書・参考書については、日本またはアメリカ合衆国でつくられた教科書が使われている。いずれもとりよせるのには時間がかかり、高価なので、個人で教科書をもっている学生はおらず、すべて大学側から貸し出す型をとっている。参考図書・資料などについても、日本に友人がいる一部の学生が送ってもらっているぐらいで、ほとんどは大学にあるものを利用するしかない。この日本語教科書・図書の収集には、国際交流基金や日本大使館の援助が大きな役割をはたしている。

ある教育機関が、新たに日本語教育をはじめようという場合、日本側の支援がなければ教科書・参考図書などを揃えることは、事実上不可能である。現在、ポーランドの日本語教育にとって日本側の支援は不可欠である。

3：協力隊への課題

〔ネット・ワークをつくる〕

ポーランドの日本語教育は、それほど広い範囲にわたって行われているわけではないのだが、それぞれの教育機関の間での連絡はあまりないようだ。協力隊員が、各機関の間をつなぐ役割をはたすことは重要である。幸いポーランドの各都市間の移動は、時間的にも金銭的にも容易である。各地に展開した隊員が、短い周期で、定期的に連絡をとり、相互に相手の授業の一部を担当したり、共同で授業研究をすることができる。また、ポーランド側の教師や学生の相互交流を企画することもできると思われる。

なお、1988年から東ヨーロッパの日本語教師の間で『日本語教育連絡会議』という組織がつけられ、毎年1度、夏休みにもちまわりで会議を開催し報告書を出版している。これは現在、東ヨーロッパの日本語教育に関しては唯一の連絡機関であり、日本語教育事情を知るためには貴重な会議である。ポーランドを含めて、東ヨーロッパに派遣した協力隊員がこの会議に参加し、活動をひろげることができるよう事務局としても考慮していた

だきたい。

〔夏休みの課題〕

夏休みが長いので、この期間の活動を充実させる必要がある。

具体的には、各地方都市での集中市民講座への参加、教材作成を共同で行うことなどが考えられる。とくに、日本語の教科書、資料が不足しているので、協力隊員がポーランドの学生にあわせた補助教材を作成することは有益であり必要である。夏休み、一つの場所に集まって、集中的にこの作業にあたるような体制を作ってゆかなければならない。

〔新たな派遣先の開拓〕

日本語教育については、それほど急速な発展はみこめない。特に現在の主流である「日本学」としての日本語教育は、ポーランドの環境と人口を考えると飽和状態にある。そこで協力隊としては

(1) すでに日本語学科の設置されている3校の支援をまず第一に考える。

(2) 今後の派遣先の開拓については、従来中心であった総合大学から、経済や工業関係の単科大学に新たな派遣先を探し「日本とポーランドの技術協力のために」という観点からの実用的な日本語教育をめざす。

広く知日家・親日家を増やしてゆく、という点で武道隊員の派遣には大きな意味がある。学生たちへのインタビューにも見られるとおり、日本に興味をもつきっかけとして武道をあげる人がとても多い。ポーランドの人にとって一番近い日本は武道であり、ここからポーランドー日本の関係は広がってゆく。今回の調査では、ポーランドの地方の思いがけない小都市にまで日本の武道のクラブがあることに驚かされた。また、このような小都市から武道をきっかけとして日本語学科に進学した学生の数は無視できないほど多い。武道隊員が任地のほかにポーランド各地のクラブにも出張指導ができるよう、事務局としても旅費その他の面で支援をお願いしたい。

II. 合気道

[1] ポーランドにおける合気道

1 配属先:

名称 POLSKA FEDERACJA AIKIDO
ポーランド合気道連盟

2 ポーランド合気道連盟の概要:

ポーランドには大きく分けて3~4つの流派の合気道グループがある。私たちの配属されたポーランド合気道連盟はその内の一つで非営利団体である。また、唯一国際合気道連盟(本部は東京)に承認されている。

このポーランド合気道連盟は国内各地にある合気道クラブ(国内29カ所以上)が集まって一つの連盟を作っている。それぞれのクラブの活動はかなり自由で独自に外国(おもにヨーロッパ)から先生を招待したりサマーキャンプを開催したりしているが、横のつながりはあまり密ではない。年に1度日本の本部道場より師範が巡回指導に来られた時にポーランド全土から会員が集まるぐらいである。

会員数及び道場数は正確に把握できていない。国内の29の町に道場がある事は分かっているが、同じ町に道場が複数存在するところもあるために実際の稽古人数は分かっていない。事務局長の話では約3000人がこの連盟に加盟する道場で稽古をしている。

役員は以下の通り;

会長	Andrzej Sobolewski	(Wroclaw, 貳段)
副会長	Roman Hoffmann	(Warszawa, 参段)
事務局長	Jerzy Pomianowski	(Warszawa, 貳段)
会計	Antoni Chelkowski	
理事	Robert J. Krac	
	Jerzy Sapiela	(Szkarska Poreba, 貳段)
	Piotr Borowski	(Gorzow, 参段)

3 ポーランドにおける合気道の歴史:

ポーランドにおいて合気道が本格的に稽古されるようになったのは17年ぐらい前である。1976年頃にドイツ国境の町シュチェチン(Szczecin)で稽古が始まった。それまでは、柔道の試合の余興として合気道が紹介されるか、武道関係の本や雑誌などでたまに見かけるぐらいであった。それでも合気道を習ってみたいと思っていた人は結構いたようで、シュチェチンで稽古を始める様になるとポーランド各地から週末などを利用して習いに来る人が何人かいた。現在ポーランド各地の29の町に道場があるが、このころシュチェチンまで通っていた人達がその後自分の町に道場を開き合気道普及の基礎となった。

1979年にスウェーデン在住の日本人師範である市村先生(当時六段)を招いて講習会が行われ、ポーランドで指導した最初の日本人となった。そして1986年には市村師範よりポーランドの最初の初段が8名に渡された。

1978年より各地の道場を統括するために一つの会を作っていたが、1980年頃からヨーロッパ合気道連盟からポーランド合気道連盟と認められるようになった。その後組

織の分裂をしながらも発展し、現在国内29の町に道場があり会員数は約3000人となっている。

1992年9月(9月30日~10月4日)に中華民国台北市で第6回国際合気道大会が開催された。この総会においてポーランド、ブルガリア、チリの新規加盟が可決され、これによってポーランド合気道連盟はポーランドで唯一国際的に承認された団体となった。

4 ポーランド合気道連盟の活動：

普段の稽古はそれぞれの道場によって稽古日や時間がまちまちである。稽古に来る人達は圧倒的に学生が多く約90パーセントを占める。そのため稽古時間は基本的には授業や会社の終わった夕方から夜に行われる。一週間に行われる回数としては、週3回~5回が平均的であり、多いところでは日曜日をのぞく毎日稽古をしている。地方の道場では週末に国内の高段者を招いて定期的に講習会を開催しているところもある。また、道場によっては独自に国外(おもにヨーロッパ)から先生を呼んで短期間の講習会をする。

夏のバケーションシーズンになると道場ごとに2週間から1カ月間の夏合宿(サマーキャンプ)を行う。お金に余裕のある人はヨーロッパ各地のサマーキャンプに参加するようである。シーズン前になると道場に各国のサマーキャンプの案内が張り出されるが、不思議な事に外国の案内ばかりで国内の案内はない。国内の道場間の横のつながりはあまり無いようである。

8月下旬には毎年恒例として、おもにヨーロッパ在住の日本人師範を招待して有段者研修会が行われる。今年に英国より金塚師範(六段)をお呼びして行われた。また、年に一度本部道場より東欧巡回指導としてポーランドにも師範が来られ、講習会、昇段審査などが行われる。

試合の無い合気道では、普段の成果発表や合気道を広く知ってもらうために演武会を開くのが普通であるが、ポーランドの場合指導者達にそのような考えがなさそうである。ポーランド日本協会主催の日本週間などで合気道の演武を依頼される事はあっても、自分達で演武会を主催し開催する事はない。

5 国内における昇級・昇段審査：

日本以外の国では昇級はその国の合気道連盟が行うのが普通であるため、ポーランドでも昇級審査は国内で独自に規定を制定し行っている。ポーランドでは審査を行う審査員にも規定をもうけている。基本的には有段者であれば昇級審査を行う権限を有するが、段位によって級を審査する範囲が決まっている。つまり、参段を有する者は6級から1級までの審査をする事ができる。式段の者は6級から2級まで、初段の者は6級から3級までと細かく決まっている。これについてはポーランド国内で賛否両論あり議論の対象となっている。現在参段2名、式段7名、初段3名の計12名の有段者がポーランドにはいるが、この数は当然ながら増えて行く。あまりに沢山の人が昇級審査の権限を持つ事にレベルの低下が起こると心配する人と、合気道を普及させる為にはこの方法が早いと考える人がいる。

昇級審査の行われる時期は特に決まっているわけではなく、それぞれの道場ごとによって必要と思われたときに行われている。道場に有段者がいて審査を受けたい者がいればその有段者の判断一つで審査が行われる。従って、昇級審査には不透明な点が多い事も確かである。

昇段審査については、年に一度日本の本部道場から師範が巡回指導に来られたときに行われる。段も本部道場から賞状が与えられ国際的にも通用するようになっている。

6 ポーランド合気道のレベル：

ここ何年間かで合気道を稽古する人数は急激に増えているようだがまだほとんどが初心者の段階である。技術的な事をいえば、受け身が上手にとれる人が少ない。有級者でも受け身がしっかりと身につけていない者が多く見受けられる。受け身が下手なので初心者かと思っていると2級とか3級ですといわれる事が多々あった。これは稽古の仕方の問題があると思われる。彼らの普段の稽古を見ているとほとんど決まった相手としか稽古をせず、特に初心者は初心者どうしとしか稽古をしない。これは有級者や有段者の先輩格にあたる人達が積極的に初心者の相手になってやらなければならないが、それをやらないために初心者がいつまで経っても上達しない。それに日本では受け身と基本動作が身に付くまで技の練習は行わないが、ポーランドでは特に受け身を稽古するわけでもなく技の練習に入っている。

国内の各道場間にもレベルのばらつきが見られる。指導者が参段から2級位までとまちまちなので当然といえば当然であるが、道場のレベルと指導者の段位がかならずも一致していない。

7 ポーランド人の合気道観：

ポーランドでは柔道を筆頭に空手、合気道、剣道、居合道、柔術などの日本の武道が行われている。武道といっても人によってはサッカーやバレーボールと同じ様なスポーツとしてとらえられ、ガムを噛みながら稽古をしたりしているところもある。ポーランドの人々がこれらの武道を稽古する動機としては、護身のため、健康増進、日本文化への興味、レクリエーションの一つと色々あげられるが、合気道にはもう一つ「合気道の持つ思想にひかれて」がある。合気道を特徴づけるものとして試合の無い事があげられ、それは合気道の持つ独特の理念からきている。これは「和の精神」と言われ、人や自然との「調和」を目的としている。ポーランドの合気道修業者のかなりの人達がこの理念に共感を覚えており、彼らにいわせればこの理念を通して何か普遍的な東洋の物の考え方や思想を理解したいようである。また、合気道修行者の中にはタバコを吸わない事は勿論のこと肉食主義者が多くみられ、環境問題に関心のある者が多かった。

これは余談ではあるが、私たちの活動中に日本より八段の師範がこられ稽古をした。稽古後その八段の師範がタバコを吸ったのをみてポーランド人は目をまるくしていた。彼らにとって合気道の師範がタバコを吸う事が信じられなかった様である。

8 稽古を通じて感じた事：

「レベル」の項でも多少ふれたが、彼らの稽古を見ているとかなり「個人主義的」である。有段者や有級者の先輩格の人間が下のものを育てる事をしない。合気道の稽古は確かに自分より上のものと稽古をした方が本人のための稽古となるが、初心者と稽古してもマイナスになることはない。彼らはいつも同じ人としか稽古をせず、初心者とは稽古をしようとはしない。稽古中に何度か注意をしてもこれはなかなか直らなかった。初心者も初心者で、いつも同じレベルどうしで稽古をするためなかなか上達しない。上達しないまま面白くなくなって、稽古をやめてしまう人も結構いるようである。先輩格の人達が少し考え方をかえてもっと色々な人と稽古をする様になれば、道場全体のレベルひいてはポーランド合気道全体のレベルが上がり、結局は自分の為になるのである。

次に、稽古に参加する女性が少なかった。合気道といえば他の武道に比べて女性が多いのが特徴であるが、ポーランドでは女性の合気道修行者が他のヨーロッパと比べて大変少ない。これは合気道が正しく理解されていない結果だと思う。合気道に限らず武道は暴力的なもの、というイメージでみられてしまう傾向があり、敬遠されてしまう。実際12歳

以下の子供が武道を稽古する事は法律で禁止されている。どの様な経緯でこの法律ができたのかは分からないが、これが一般的な武道に対する認識である。

この様な誤解を解くためには演武会や初心者講習会などを積極的に開催して合気道を広く理解をしてもらうしかない。しかし、前述の「個人主義」と関係があるかどうか分からないが、演武会などの開催にあまり積極的ではない。

〔2〕合気道隊員の要請背景

1 隊員要請の有無：

ポーランド合気道連盟としては数名の合気道隊員の受け入れを希望している。また合気道連盟とは別に、首都ワルシャワから北へ約200キロ離れたところにある警察訓練学校（場所 Szczytowo）からも、訓練課程のなかで逮捕術を教える事ができる隊員を欲しがっている。一応合気道隊員での要請が上がる様であるが、合気道隊員で対応できるかどうかは分からない。

2 隊員に求められるレベル：

合気道連盟の事務局長であるポミアノフスキー氏との話では六段の隊員を送ってほしいといわれた。六段では協力隊のレベルではないし、協力隊の参加資格により年齢的にも難しい事を説明したがあまり納得はしていない様であった。

この6カ月間私たちが実際に活動してみたところ、隊員に要求されるレベルとしては最低でも参段は必要だと感じた。また、できる事ならば四段が望ましい、という感想をもった。現在ポーランドの最高段位は参段で2名いる。彼らはポーランド各地を回って指導を行っている。隊員が指導する立場として入るのであれば少なくとも彼らと同じか、それ以上の段位が必要である。杖や剣も彼らは習いたがっており、それらも教えられる事ができた方がよい。

ポーランドにはドイツ、フランス、イギリスなどのヨーロッパの国々から高段位の先生が年に何度か稽古にこられる。したがってポーランド人の目が合気道に対してある程度肥えており、隊員を入れるのであればそれ相応のレベルの高さが要求される。

実際問題としてここ数年協力隊の合気道隊員の応募状況はあまりよくない。また、四段以上の応募は極めて少ないのが現状である。一般的な協力隊のレベルである二段や参段で隊員を派遣して行くのであれば、合気道連盟とは別の受け入れ先を開拓する必要がある。

中学校や高等学校で体育の授業として合気道が取り入れられれば、二段ぐらいのレベルで対応できる。事実私たちの活動中にもウッジの吉田さんを通してウッジの高校が指導を要請してきた。若い人達にも日本文化や日本の武道に対する興味は高いので、もっと細かく調査をすれば中学や高校から要請が上がって来る可能性はある。

3 業務内容：

巡回指導が基本的な活動形態になると思われる。巡回する期間、場所は実際に赴任してみないと分からない。今回我々も各地を巡回したが、1週間～1カ月以上と期間はまちまちであった。事務局長の話では、四段の隊員が得られれば半年ぐらいずつ巡回をして三カ月に一度週末にセミナーを開いてほしいと言っていた。参段の隊員の場合一年間一つの道場を指導してもらい次の一年は別の道場を指導するという、一年毎の巡回指導を希望していた。ただし、この考えはあくまでも事務局長の個人的な考えであるので、実際にこの通

りになるとは限らない。

7月・8月にはポーランド全土がサマーバケーションのシーズンに入るので、ほとんどの道場も休みになる。しかし、道場によってはこの期間を利用してサマーキャンプを1週間～1カ月ぐらいの単位で開く。隊員が入ればあちこちのサマーキャンプに招待されるので、夏の間はサマーキャンプへの参加が重要な隊員の活動になると思われる。

4 受け入れ体制：

a 隊員の身分：AIKIDO INSTRUCTOR

合気道の先生として敬意を払って接してくれる。

b 住居：住居は受け入れ側で用意できる。巡回指導をするので巡回する先の道場が基本的には住居を用意する。住居はホームステイかスチューデントホテルのどちらかである。ホームステイをする場合は食事の質などを考えると長期的にはつらいかもしれない。スチューデントホテルは大学などの学生寮を一般の人にも解放しておりポーランド各地にある。台所が付いていないところも多いので、そうした場合は食事は外食に頼るしかない。近くに食事をするところがなかったり、あっても夜稽古の後には閉まっていたりと、どちらに住むにしろ食事には工夫が必要である。

c 交通費：巡回指導するときの交通費は合気道連盟の方で出してくれる。ポーランドは鉄道が整備されているので巡回する場合鉄道での移動が主になる。切符を自分で購入した後で請求する場合と、合気道連盟の方で切符を用意してくれる場合とがある。自分で立て替えた場合こちら側からしっかり請求しないと忘れられる事もある。

5 協力隊に対する理解度：

協力隊の事はほとんど理解されていない。どこの道場へ稽古に行っても、どの様な経緯で私たちが来たのかを知る人は誰もいなかった。私たちが地方巡回に行く前に各道場に事務局長より連絡はあったそうであるが、それには単に「日本より四段の人が二人来ます。男と女です。どちらに来てほしいですか。」としか書かれていなかったそうである。だから最初はどこへ行っても「ポーランドに旅行に来たついでに合気道を稽古する」ぐらいにしかとらえられていなかった。したがって、毎回新しい道場に行く度に協力隊の事などを説明しなければならなかった。

今回私たちの調整役として事務局長のポミアノフスキー氏が窓口になった。彼が会員の人達、あるいは少なくとも指導者の人達に私たちがポーランドに来た経緯や協力隊の事についてのインフォメーション流してもらえれば、もっと大勢の会員に協力隊の事を知ってもらえた事と思う。

6 活動する上での注意点：

ポーランド合気道連盟は民主的な団体である。民主的すぎてリーダーシップをとれる人が誰もいない。現在指導的立場にある人は皆同じ頃合気道を始め、同じ年数稽古をし、段位も同じぐらいである。一応会長、副会長、事務局長と役職は決めているがほとんど名前だけにすぎない。その名前だけにすぎない事を利用して勝手な事をする人がいる。

ポーランド合気道連盟の対外的な窓口は事務局長である。つまり、色々な情報は事務局長に入って行く。普通であれば事務局長が会長や副会長に報告をして話が進んで行くが、ポーランド合気道連盟の場合、事務局長が自分や自分の運営する道場に都合のよいようにかなり独断的に物事をすすめてしまう。それに対して会員の不満はかなり高まっている。

隊員が活動して行く場合事務局長が全て隊員活動の調整をするので、事務局長の思うよ

うにふりまわされる事もある。JOCVのCは COOPERATION のCであるが、彼の場合COOPERATION とゆう考えはあまりなく、一方通行でやってもらいたい事だけを言われる。したがって、事務局長との関係が隊員の一番注意する点である。

7 まとめとして：

ポーランド合気道連盟はドイツ、フランス、スウェーデン、フィンランドと比較的合気道の普及している国の合気道連盟と交流があり、時にはフランスの連盟が費用を負担して短期間ではあるが先生を派遣したりしている。そして、ポーランド自体もそれらの国から先生を自費で招待し、逆にラトビアやベラルーシに無料で講習会をしに行っている。率直に言って協力隊がいなくても彼らは自分達でやってゆくのである。

そこに隊員を派遣するのであれば当然レベル的にも二段ぐらいの隊員では彼らは納得しない。文化交流が目的であれば二段でも構わないが、そうでなければしっかりとした高段者を送るよう努力すべきである。

[3] 活動報告

1 演武会：

a 日時 1993年2月23日 午後8時～

場所 ワルシャワ グバルディア道場

目的 安藤、小林両隊員の顔見せ的演武会。最初平常通り稽古した後私たち二人が約5分間ずつ演武をした。テレビ局も取材に来て、後日5時からのニュースで放送された。

観客 約50名

b 日時 1993年6月13日 午前10時～

場所 ウッジ ウッジ市民体育館

目的 ポーランド日本協会ウッジ支部主催の日本週間に参加。最終日に柔道、剣道、居合道、杖道と共に演武を行った。ワルシャワやウッジの道場からも応援を得て、総勢7名で稽古風景や個人演武など体術のみ約15分間の演武をした。このときもウッジのローカルテレビ局が取材に来ていた。

観客 約100名

c 日時 1993年7月24日 午後6時～

場所 オポーレ 工業専門学校体育館

目的 ポーランド日本協会オポーレ支部が開催した短期日本語集中講座の最終日に行われた日本文化セミナーに参加。日本の折り紙の紹介の後、場所をかえて合気道、弓道が演武された。最初に観客の中から有志をつのり合気道を体験してもらい、その後杖、剣もふくめて約15分間演武をした。新しく平成5年度1次隊で赴任した隊員による剣道の演武も予定されていたが、別送で送った道具が到着せず中止となった。

観客 約150名

2 巡回指導：

各道場における活動は次ページ以下参照の事。

活動報告 安藤 洋子

	ゼロツフ	ラドム	ピフ	クラブ	オルスチン
活動期間・・・	3/6 ~ 4/17	4/23~4/29	5/1 ~9, 5/16~29	6/2 ~4, 6~12	6/17~7/1
時間.....	7:30~9:20 毎日 20:30~22:00月木	19:00~20:30 毎日 28日16:00~17:00	20:15~21:30 平日 AM2時間, PM3時間(土日)	19:00~21:00 毎日	毎日変動 2~2.5時間(夕方)
場所.....	職業訓練校	スポーツクラブ	軍隊	スポーツクラブ	軍隊
普及の稽古日	同上	月水金	月水金	月水金	2日毎(17:30~19:30)
レベル.....	初心者	初心者・初級者	初心者・初級者	初級者以上	初心者
指導者.....	クリスト・ゾゲル 無級	アソヴェ・ソボラスキ 二段	ハ・ワ・シウ(女性) 1級	ハ・ウ・ホ・ア・ツク 初段	ガ・ホ・ド・コ・ハ・リ・ツク 無級
会員数.....	50(学生)	50(学生一般)	30(学生一般)		30(学生)
備考.....	指導者は当職業訓練校の体育クラブ(課)の教師で太極拳も教えている。また、ゼロツフ大学合気道クラブ(新設)も指導(木金2:00~3:30)	金は合気剣の稽古。ゼロツフ在住。電電公社勤務。91年春JICA研修員で日本訪問。現在ポーランド合気道連盟会長。	他に1クラブあり。そのクラブはこのクラブから独立。女性が指導者になることは大変なようだ。ポーランド自体は男性社会の為圧迫を受ける事が多いという。保除会社勤務。稽古歴12年		稽古歴12年 オルスチンより80Km離れた所に住み、勤務。(刑務所の看守)

活動報告 小林 弘明

	フルシャワ	クラクフ	ビットム・カトヴィツェ	ズウォトゥフ
活動期間	3/4 ~ 4/30	5/23~30, 6/2~4, 6/9	6/18~28	7/1 ~ 7/7
時間	19:15 ~ 22:00 火 ~ 金	9:00 ~ 11:00 15:00 ~ 17:00 月 ~ 金	16:00 ~ 17:30 18:00 ~ 19:30 木 ~ 土	9:00 ~ 10:30 17:00 ~ 18:30
場所	柔道クラブ	スポーツクラブ	高等学校の教室	市民体育館
普段の稽古日	月 ~ 金	月 ~ 土	月 ~ 土	月 ~ 金
レベル	初心者 ~ 有段者	初心者 ~ 有段者	初心者 ~ 中級者	初心者 ~ 中級者
指導者	エイジ・ボリツキー 他有段者	トマシュ・スワフスキ 初段	ヤツェク・ガイダルツキ 2段	マリアン・ガイダフスキ 二段
会員数	120 (学生一般)	30 (学生一般)	30 (おもに学生)	50 (学生一般)
備考	事務局長であるボリツキーが会長となっていて、最大の人数を誇る。掃除などいささか、ガムを噛みながら稽古をするものもある。	合気道専用道場をかりている。指導者がしつかりしており、日本の道場と比べると変わらない。ボリツキーは現在合気道連盟副会長。	毎年道場の場所が変わっている。稽古に参加したい人がいてもすぐには見つけられない。指導者を含めて学生のため、会費も安く抑えられている。運営が大変そうである。	ピワから車で約40分ぐらいの所にある小さな町である。この様な小さな町でも50名程の合気道修業者がいた。夏休みに入っていたため、近くの町からも稽古に来ていた。

3. ポーランド合気道連盟昇級審査規定：

・ 6級（入会后 4 カ月）

立 技：足捌き 転換 入身転換 膝行 受け身
 技：片手取相半身入身投げ、小手返し、一教、四方投げ
 片手取回転投げ（内回転） 正面打入身投げ

・ 5級（6級取得後 5 カ月）

立 技：正面打一教、二教、小手返し 中段突入身投げ、小手返し
 片手取四方投げ、天地投げ、一教、腕決投げ、呼吸投げ
 座 技：正面打一教 肩取一教

・ 4級（5級取得後 6 カ月）

立 技：正面打三教、内回転三教 中段突腕決投げ、肘決投げ
 横面打四方投げ、入身投げ、天地投げ、小手返し、腕決投げ
 上段突一教 両手取一教、四方投げ、天地投げ、腕決投げ
 片手取二教 諸手取小手返し
 座 技：正面打二教 片手取二教 両手取呼吸法
 杖 剣：杖素振り 1～5 木剣素振り 1～7

・ 3級（4級取得後 8 カ月）

立 技：正面打四教、五教 横面打一教、内回転三教
 中段突外回転投げ、内回転三教 上段突小手返し、四方投げ
 片手取内回転投げ、三教、四教 諸手取一教、二教、四方投げ
 両手取入身投げ、小手返し、呼吸投げ
 後 技：両手取一教～三教、肘決投げ、小手返し（入身、転換）
 “ 入身投げ、十字がらみ、四方投げ
 座 技：正面打入身投げ、小手返し、三教 肩取三教
 杖 剣：杖素振り 1～10 木剣四方切

・ 2級（3級取得後 10 カ月）

立 技：横面打二教、三教、四教、五教、腰投げ
 胸取一教、四方投げ、内回転三教
 肩取面打小手返し、四方投げ、入身投げ、腰投げ、一教
 上段突二教、三教 前蹴入身投げ
 後 技：襟取一教 両肘取小手返し、入身投げ 片手首締一教
 両肩取二教、三教、入身投げ、小手返し
 座 技：正面打回転投げ、外回転投げ 両肩取一教
 中段突小手返し 上段突一教
 杖 剣：素振り 1～15 木剣八方切

・ 1級（2級取得後10ヵ月）

立 技：胸取面打一教～三教、腰投げ

座 技：上段突回転投げ、腰投げ、入身投げ、外回転投げ、後切落し

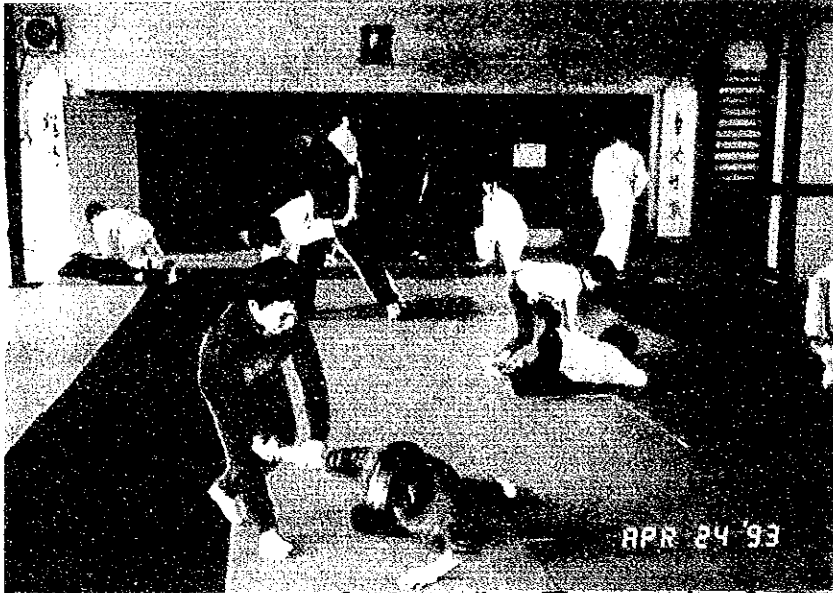
後 技：両手取四教、呼吸投げ、腰投げ 片手首締二教、三教、腰投げ
襟取二教、三教、入身投げ

半身半立：片手取四方投げ、内回転投げ、一教、呼吸投げ

座 技：正面打自由技 両肩取三教、四教

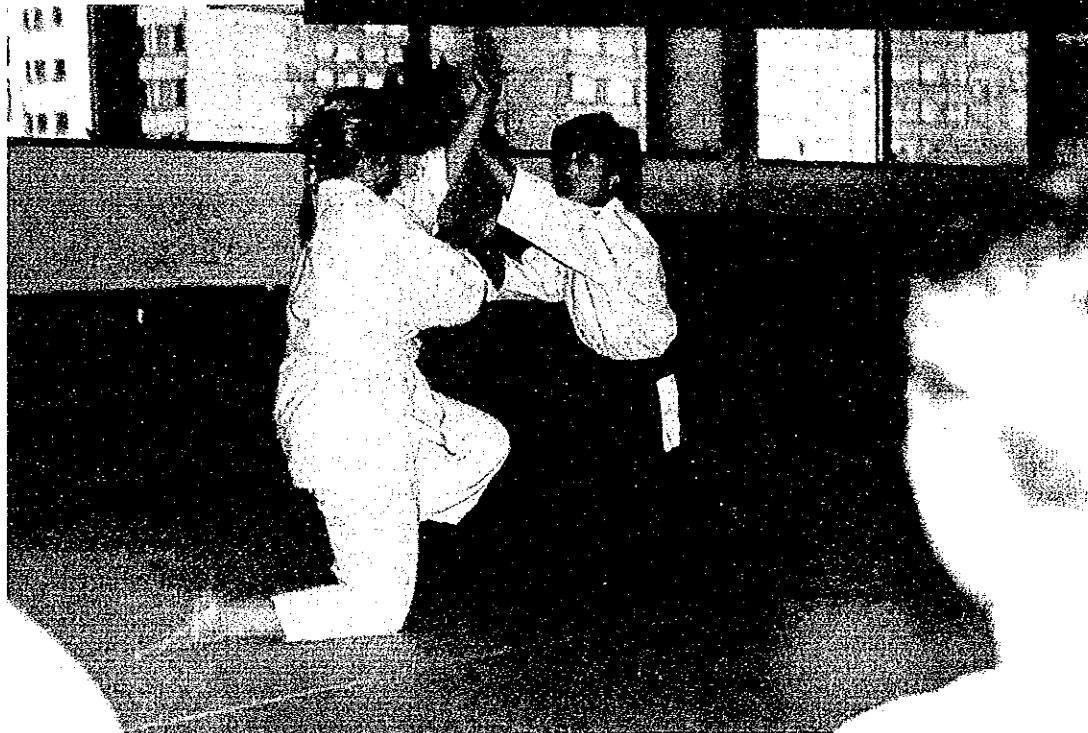
肩取面打入身投げ、小手返し、呼吸投げ

杖 剣：杖素振り1～20及び31の型



ラドムの子供クラス稽古風景。
ポーランドでは子供クラスは珍しい

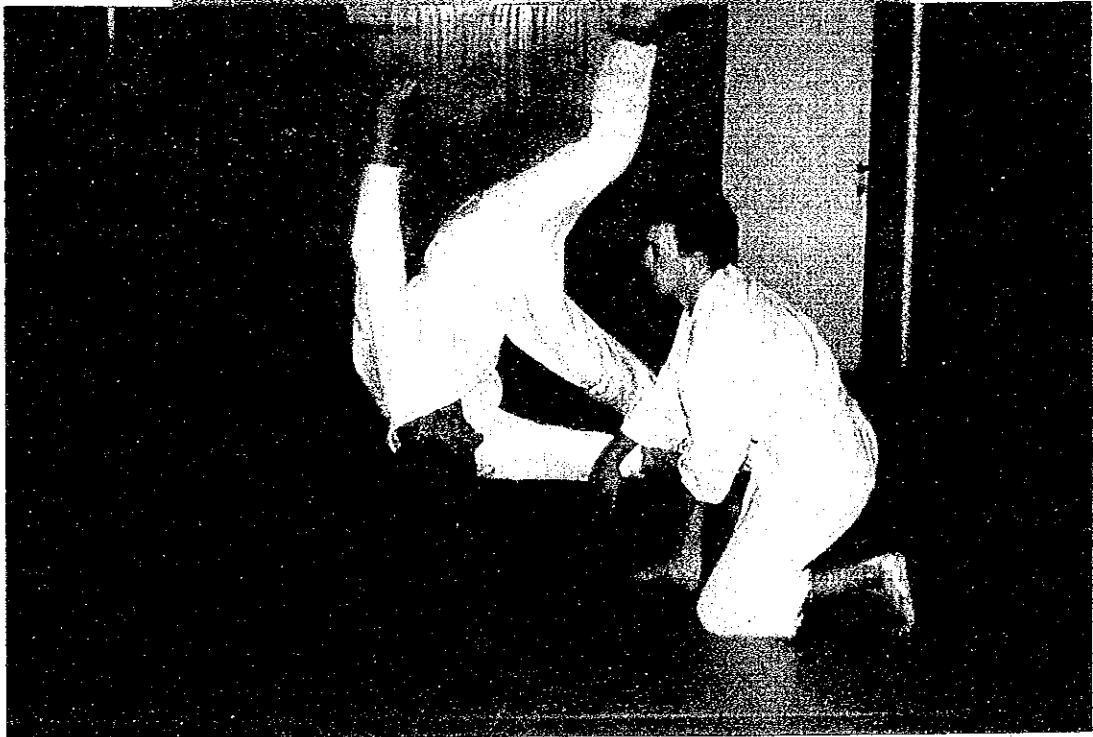
ピワの合気道クラブの会
員達。女性が指導者にな
っている



安藤隊員の
指導風景



安藤隊員の指導風景



ポーランドの会員。呼吸投げが決まる



オポーレでの演武会。安藤・小林両隊員による杖、剣の演武



オポーレでの演武会。体術の演武

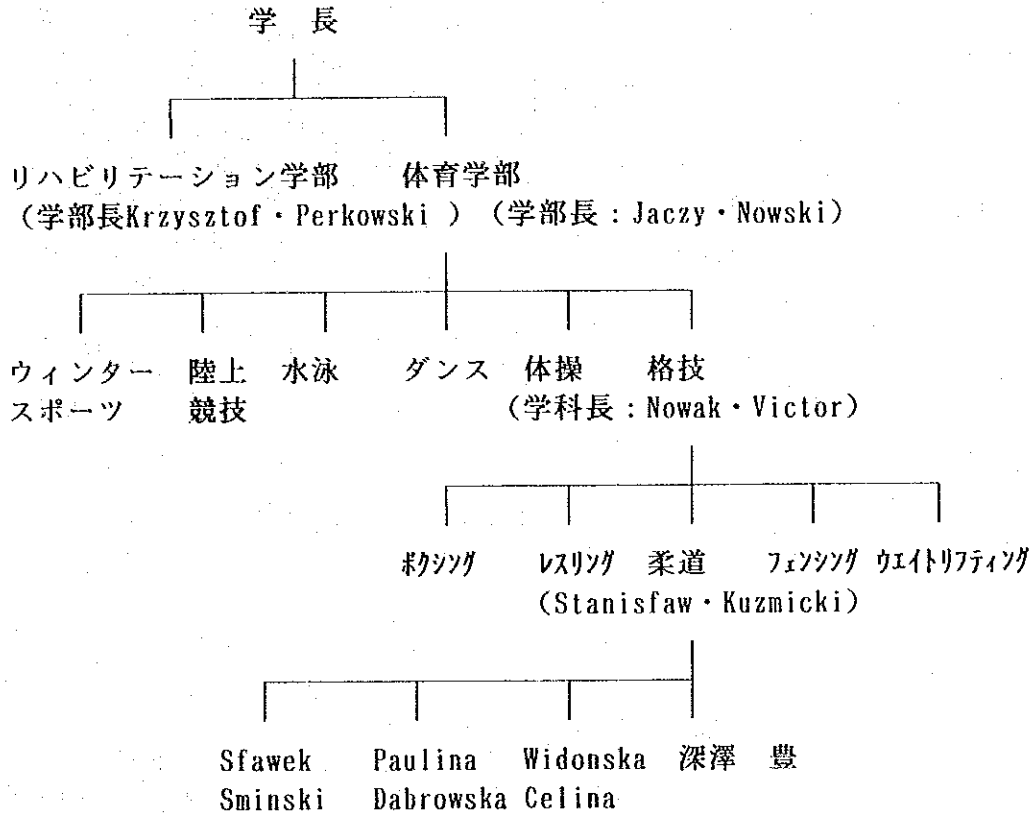
[Ⅲ] 柔道

[1] 受け入れ体制

1. 機関名：ワルシャワ体育大学
2. 組織と規模

1929年に創設された、国立の体育大学で、学生数は1000名（うち柔道専攻は40名）にのぼる。体育学部とリハビリテーション学部から成り、スポーツの選手および指導者、体育科の教員、そしてリハビリテーションの専門家の養成を行なっている。

組織図（1993年6月1日現在）



この他に大学附属のスポーツクラブがある。これは日本のいわゆる部活動とは、かなり性質の違ったものだ。日本の部活動が学内の課外活動なのに対し、このスポーツクラブは一般公開の社会体育事業である。したがって登録をして会費を払えば、体育大学の学生に限らず、誰でもが利用できる。（社会主義の時代には、会費を払う必要もなかったことをつけ加えておく）

柔道では、中学生以下（40名程度）と高校生以上（30名程度）に分かれている。なお実力のある選手をナショナルチームに加えてゆくことも前提に活動しており、国際試合のための人材発掘養成といった機能も持ち合わせている。

3. 隊員の地位

組織図にあるとおり、大学の柔道教官の一人。また、クラブのコーチの一員も兼ねている。

地方のクラブへ巡回する際は、大学への要請に応じた出向という形になる。

4. 予算

国立大学であることから、政府の予算で運営することになっている。スポーツと福

社に関係した機関だけに、社会主義の時代には十分な予算が、国からおりていたということである。

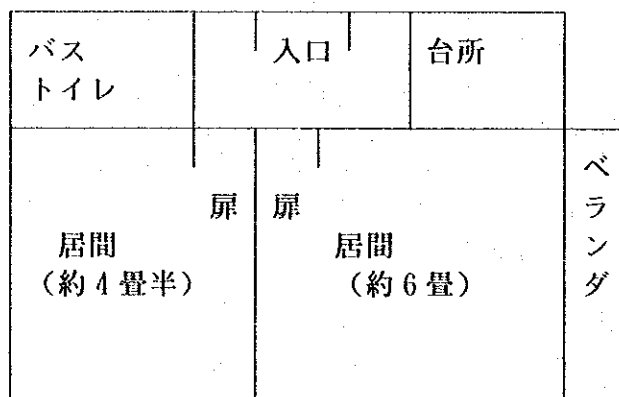
自由化以降は“ない袖を振ってでも”という訳にはいかず、必要な金額の半分も出ればいいほうになっている。

スポーツクラブを有料化したり、大学の施設を有料で開放したりといったことの収益で不足分にあてている。また現在のところ、授業料の徴収も検討中ということである。

5. 住居手配状況

大学の敷地内にある教員住宅が、住居として無料であてられる。11階建ての集合住宅の一郭で、間取りは下図のとおり。

家財道具も最小限のものは揃っている。ただし電話は、ロビーにあるカード電話を共同で使用することになる。したがってこちらからかけるのは可能だが、相手から受けるのはほとんど不可能。せいぜい受け付けに電話をしてメッセージを頼む程度。日本人の感覚からすれば不便だがポーランドではこのような状態は珍しくない。電話の普及率がおもわしくないということである。こまめにJICA事務所に足を運ぶなどして連絡を密にすることも必要となる。



[2] 業務内容

配属先での活動は、体育大学の授業とクラブでの指導になる。授業は初心者を対象にしたものと柔道専攻の学生を対象にしたものがあり、前者は基本技、後者は応用技を中心に展開する。

[1] - ②に書いたとおり、クラブは小、中学生を対象にしたものと高校生以上（ほとんどが高校生と大学生で初段、2段クラス）を対象にしたものがある。

地方巡回では、ビヤウエストック、ハイヌフカ、ウォビッチ、ウッジキエルトツェ、エウクの6つの都市で指導を行なった。

対象は小学生から20才くらいまでの青少年で、初心者から初段クラスまで。いずれも経験日数によってクラス分けが行なわれている。だいたい半年くらいをめどに、初級者クラスと中級者クラスに分かれる。やはりここでも、前者では基本技、後者では応用技を中心に展開することになる。期間が短いということもあり、得意技についての解説を求められることが多かった。

その他に、柔道修練者以外を対象とした活動が2度あった。1回目は警察学校において、逮捕に応用できる技の解説。講道館護身術のうち、簡単で実践的なものをいくつか紹介しておいた。2回目は小学校の体育の授業を柔道に関係した教材で展開。興味をひきそうな補強運動から入り、受け身が出来なくてもすむことから、抑え技の簡単なものを紹介して、寝技の乱取りでしめくくった。このような変則的な

業務があることは、今後も十分予想される。

活動の形態は、主導権をもつ場合と他の教官やコーチの補助（指示された技の示範および説明）の場合とがある。最初のうちは、やはり後者がやりやすい。ただしこればかりでは、活動として物足りないということになる。

慣れてきたところで、徐々に主導権をもった形態を増やしていくと活動しやすくなると考えられる。このことは、配属先とも話し合っておいた。

[3] 柔道事情

1. 普及度

柔道人口はおおよそ1万人、うち有段者が1,000人と言われている。3,800万人という国の人口からすれば、普及度は高からず低からずといったところだろうか。

また、経験はなくとも、柔道を含め武道に対する関心は非常に高い。けっしてアクション映画に影響されたというようなレベルではない。

「武士道精神とは何か？」あるいは「柔道の極意は何か？」といった、日本語でも簡単には説明できないようなことを質問されて、立往生してしまったことも少なくない。そのくらいだから、協力隊の活動によりさらに底辺を拡大して行く可能性は十分考えられる。

2. レベル

資料にあるとおり、すでにオリンピックメダリストが出ており、競技水準はきわめて高い。ただし、その割には、選手層は薄い。つまりトップクラスと2番手3番手との間に開きがあるということだ。全国のベストエイトクラスで、日本の大学の地方大会上位レベル。国際的な一流選手が出ている国にしては、全体としてそれほどでもないが、協力隊を派遣している国にしては、ハイレベルといった実状である。

その他、理論、指導法、審判等についてもある水準には達しており、少なくとも隊員が指導しなければならないようなことはない。したがって、隊員の活動目標に、レベルアップあるいは技術移転といった要素はほとんどないと見てよいだろう。

3. 施設、用具

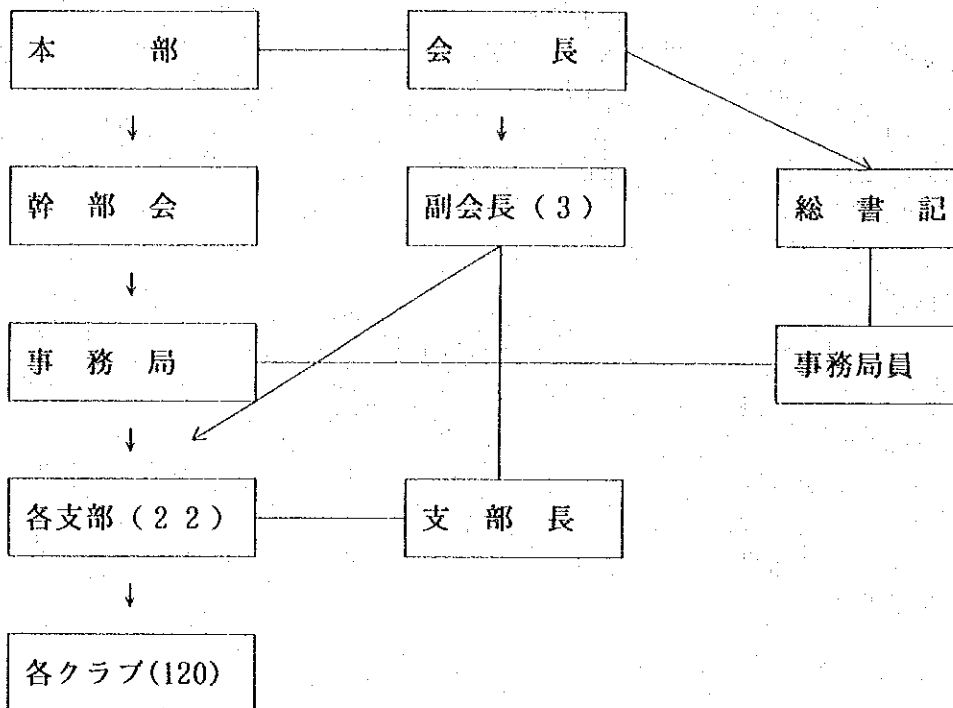
施設、用具はさすがに充実している。おそらく、スポーツには力を入れていた社会主義時代の遺産だろう。

ワルシャワ体育大学では、道場が二ヶ所（288畳と144畳）トレーニングルーム（もちろん機材は完備）、シャワーは言うに及ばず、サウナまでついている。地方のクラブであっても、道場（最低でも100畳程度）の他に、トレーニングルーム、シャワーは必ず備わっている。公式戦では、日本で使うのと同じ柔道専用の畳で4試合場、そして電光掲示板も揃う。ただし、練習で使う畳は、90cm×180cmのウレタンにラバーを貼ったものがほとんど。軟らかすぎる点で若干品質は落ちるが、それでハンディキャップが生じる程ではない。

柔道着も国内で購入可能、十分に普及している。したがって今のところは、施設、用具の不備で隊員活動に支障をきたすようなことは、まずない。

ただし、予算の都合で施設、用具の維持が困難になりつつあるのも現状なので、今後状況が変わることは十分予想される。

4. 協会組織



会 長 : Kazimierz · Jaremczak

副会長 : Wojtek · Borowiak

: Tadeusz · Naskret

: 空位

総書記 : Jan · Slawski

1993年6月20日現在

なお副会長のWojtek · Borowiak氏はワルシャワ体育大学柔道クラブの監督。
したがって配属先から柔道協会への窓口になっている。

[4] 今後の展望

1. その他の隊員派遣の可能性

ワルシャワ体育大学において、リハビリテーション関係の職種で、隊員を派遣できる可能性が高い。

学長との会見で、リハビリテーションの方に指圧の隊員を呼べないかと質問されたので、可能である旨答えておいた。その他にも、鍼灸など日本独自のものに活動の余地があると考えられる。

柔道隊員に関しては、他の機関でも希望はあるが、住居提供等の問題で、受け入れ体制が整わないのが現状である。

住居については、JICAで肩代わりできることを言いかけてやめた。契約どろりに事を選ぼうとする紳士的な態度に墮落のきっかけを作ることになりかねない。

2. 隊員に求められる資質

ポーランドでの協力隊活動は、他の国のものとはかなり質的に異なっている。

Ⅲ-②で書いたようにレベルの高い国なので、技術移転の要素はほとんどない。ただし、日本および日本文化への関心が非常に高い国なので人的文化的交流に、より重点が置かれることになる。

ことに柔道については、かつて日本人の指導者（現プエルトリコ・ナショナルチー

ム(富田監督)がポーランド・ナショナルチームの強化に多大な貢献をしたという経緯もあり、ある種の期待ももたれている。とはいえ、協力隊の実態からそれほどハイレベルの指導者が来るとは限らないことを説明したところ、「レベルの問題ではなく、ともかく本家である日本の指導者が欲しい。そして日本人の柔道を直に見たい」というのが先方の主旨であった。つまり、より日本的な(いわばきれいな)柔道をする指導者が求められている。

また、他の途上国であれば、隊員が最も強い存在となり、それだけで優位に立てるが、ポーランドでは、それは不可能に近い。ただし、負けたからといって致命傷になる訳ではないのも、他の途上国と違うところである。

選手と指導者は別だということは、わかまえているようだ。

むしろたとえ強くても、教え方が悪いことの方が致命傷になりやすい。ある程度の指導技術は身につけておく必要がある。

以上のようなことから、技の強さよりもうまさ、競技力よりも指導力が隊員の資質として求められる。

なお、当初資格として出ている三段以上という条件について説明を求めたところ、「投の形」と「固の形」が出来ることを目安として出した条件ということであった。そのことから、これらの形が出来て相当の実力があれば、二段以下でも差し支えないことを確認しておいた。

3. 活動上留意すべき点

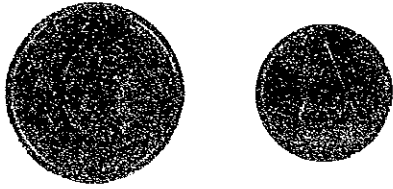
日本では、柔道イコール修練であり、苦しい練習を通して技を磨くという考え方が根底にある。しかしポーランドでは、柔道をスポーツとして楽しみながら、その技能を高めるやり方をとっている。

善し悪しは別にして、この相違点を抑えておかないと、活動がしにくくなるのは明らかである。

ワルシャワ体育大学のクラブでは、水曜日を乱取り中心の日ときめている他は、特に毎日の練習内容は定まっていない。サッカーやゲーム等を取り入れた変化に富んだメニューが、その日の状況に応じて組まれることになる。また練習時間も1日1時間半と短く、効率よく集中的に行なっている。

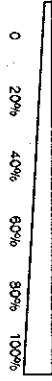
こういった状況から、毎日同じパターンを繰り返す日本式のやり方は受け入れられにくい。やはり、飽きさせない工夫(ex…目新しい教材を提示して、興味をもたせる。ゲーム等を取り入れて楽しく練習させる。…など)が必要だ。ただし、合わせてばかりでは、活動の意味が薄れてしまう。日本のやり方を知ってもらうのも、隊員の役割の一つだ。

ポーランド人にとって受け入れやすい方法を取りながらも、日本的なものを打ち出すというきわめて困難なことが、最も重要な課題となろう。



電話用のA、Cジュトン

100



TELEKOMUNIKACJA POLSKA S.A.



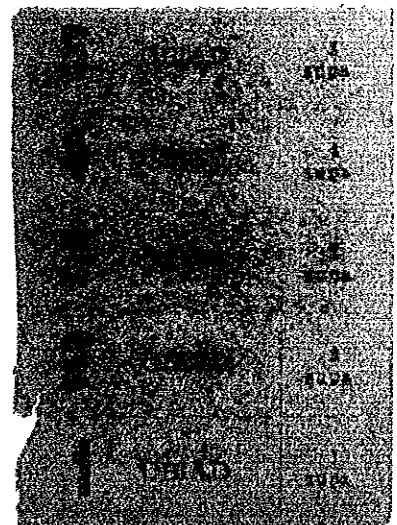
磁気カード 100度数



金額が記入されていない“A、B”切手

POLITECHNIKA WARSZAWSKA
 DOM STUDENCKI nr 11 ZATYTUŁ
 ul. W. KOSCIUSZKA 11A
 02-500 WARSZAWA
 tel. centr. 45 15 45-48
 adm. 45 47 69
 fax 45 47 69
KARTA WSTĘPU NR
WAŻNA DO DN. 1993. 05. 31
 DLA OB. *Nowa Hiszpania*
 KIEROWNIK *zakwaterowań*
 DO POKOJU NR *413* na *Słotnicka*
 PODPIS WL. KARTY PODPIS WYSTAWIAJĄCEGO

学生寮の入館証



学生食堂の食券



ポーランドの紙幣
実物



